

鹿角市文化財調査資料47

地 羅 野 館 跡

発 掘 調 査 報 告 書

1993-3

秋田県鹿角市教育委員会

序

鹿角市には、国の特別史跡大湯環状列石をはじめとして、数多くの遺跡が残されています。

このたび、市道「市役所東町線」建設に伴い地羅野館跡の一部が消失する恐れがでたため、同館跡の記録保存を目的に発掘調査を実施いたしました。

その結果、竪穴住居跡、竪穴造構のほか古代・中世の資料を得、大きな成果をあげることができました。

本書は、この成果をまとめたものであります。文化財保護へのご理解と歴史研究にご活用いただければ幸いに思います。
終わりに、この調査に際し、ご指導・ご協力くださいました関係機関、各位に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

鹿角市教育委員会

教育長 浅利 忠

例 言

1. 本報告書は、秋田県鹿角市花輪字地羅野13番地他に所在する地羅野館跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆は、調査員が分担し、文責は各々の文末に記した。
3. 遺物の実測、探拓、トレース等の整理作業は、調査員、調査補助員が行った。
4. 資料の分析並びに鑑定等は下記の方に依頼した。

蛍光X線分析 奈良教育大学教授 三辻 利一

陶磁器鑑定 金沢大学文学部教授 佐々木達夫

石器類石質鑑定 秋田県立十和田高校教諭 錠田 健一

5. 土層の色調の記載には、財団法人日本色彩研究所『新版 標準土色帖』(1988年版)を使用した。
6. 本報告書に収載した地形図は、建設省国土地理院発行の「花輪」(1/25,000)及び、「鹿角の館(5)」に収録されている「地羅野館跡現況図」等を使用した。
7. 本報告書に収載した遺構・遺物の縮尺については、それぞれにスケールを付している。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
8. 本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するよう努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略化している場合もある。
9. 本文、挿図等で使用している記号、スクリーン・トーンは以下のとおりである。

S D……空堀、溝状遺構 S K……土 塹 S I……竪穴住居跡

S T……竪穴遺構 ……焼 土 ……白色粘土 ……柱痕跡

……地 山

10. 発掘調査・報告書作成にあたっては、次の諸氏からご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)
- 富樫泰時、桜田 隆(秋田県埋蔵文化財センター)、板橋範芳(大館市教育委員会)
佐藤 衡(秋田県文化財保護管理指導員)

本文目次

序

例言

本文目次

図版・写真図版・表目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地	1
2. 地図野誌とは	1
3. 周辺の遺跡	5

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過	7
2. 調査要項	7
3. 調査の方法	9
4. 調査の経過	9

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 遺跡の層序	10
2. 郭上面調査区の遺構と遺物	10
(1) 穴穴住居跡	12
(2) 穴穴遺構	15
(3) 土 壁	25
(4) T ピット	38
(5) 柱穴状ピット	38
3. 郭斜面調査区の遺構と遺物	38
(1) 空堀・土壁	41
(2) 溝状遺構	43
(3) 犬走り遺構	43
4. 遺構外出土遺物	44
(1) 土 器	44
(2) 石 器	44
第Ⅳ章 自然科学的分析調査	49
第Ⅴ章 まとめ	53

図版・写真図版・表目次

図版目次

第1図 地羅野館跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 地羅野館現況図	4
第4図 地羅野館周辺切絵図	5
第5図 遺構配置図	11
第6図 基本層序	11
第7図 第3号竪穴住居跡実測図	13
第8図 第7号竪穴住居跡・第6号竪穴遺構実測図	14
第9図 第1号・9号竪穴遺構、第10号土壤実測図	16
第10図 第2号・11号竪穴遺構、第39号土壤実測図	17
第11図 第3号・4号竪穴遺構、第31号・32号土壤実測図	19
第12図 第5号竪穴遺構実測図	21
第13図 第7号竪穴遺構実測図	22
第14図 第8号・10号竪穴遺構、第40号・41号土壤実測図	24
第15図 第1号～6号土壤実測図	26
第16図 第7号～14号・38号・50号土壤実測図	29
第17図 第15号～22号・37号・42号・43号土壤実測図	31
第18図 第24号～33号土壤実測図	33
第19図 第44号～51号土壤・第36号Tピット実測図	36
第20図 柱穴状ピット配置図	39
第21図 第1号空堀土層断面実測図	40
第22図 第2号空堀土層断面実測図(Cトレンチ)	42
第23図 第3号溝状遺構土層断面実測図	43
第24図 出土遺物実測図(1)	45
第25図 出土遺物実測図(2)	46
第26図 出土遺物実測図(3)	47
第27図 出土遺物実測図(4)	48
第28図 Fe因子の比較	50
第29図 Rb-Sr分布図	50
第30図 K-Ca分布図	50

第31図 クラスター分析	51
第32図 蛍光X線分析試料	52

写真図版目次

P L 1 地羅野館跡	59
P L 2 地羅野館跡近景(1)	60
P L 3 地羅野館跡近景(2)	61
P L 4 第 I 郭北側空堀・地羅野館跡近景	62
P L 5 第 I 郭西側中段・調査風景	63
P L 6 第 3 号・7号竪穴住居跡	64
P L 7 第 2 号・3号・4号・11号竪穴遺構	65
P L 8 第 5 号・7号・8号・10号竪穴遺構	66
P L 9 第11号竪穴遺構・郭上面西側竪穴遺構群	67
P L 10 第 1 号・2号・4号土壤	68
P L 11 第 6 号・8号～10号土壤	69
P L 12 第11号～14号・50号土壤	70
P L 13 第15号・19号・20号土壤	71
P L 14 第22号・24号・25号・27号土壤	72
P L 15 第40号・44号・45号土壤	73
P L 16 第47号土壤・郭上面全景	74
P L 17 第 1 号空堀・犬走り遺構	75
P L 18 郭西側中段の土壘・第 3 号溝状遺構	76
P L 19 出土遺物(1)	77
P L 20 出土遺物(2)	78
P L 21 出土遺物(3)	79
P L 22 蛍光X線分析試料	80

表 目 次

第 1 表 遺跡一覧表	6
第 2 表 分析値	51
第 3 表 蛍光X線分析試料一覧	51

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地

地羅野館跡は、鹿角市花輪字地羅野13番地他に所在する。位置的には、JR東日本花輪線陸中花輪駅と十和田南駅の間にある柴平駅の南東約1.8kmである。

遺跡の所在する鹿角市は、秋田県の北東部に位置し、北は青森県と東は岩手県と県境を接している。一方、鹿角市ののる鹿角盆地は、奥羽山脈と高森山地に挟まれた南北に細長い盆地である。盆地内を北流する米代川は、十和田地区で大湯川と小坂川を合流し、その流れを西へ変え、日本海へと向かう。これら河川及びその支流により形成された河岸段丘が盆地東側に発達している。館跡は、この米代川右岸の段丘上に立地しているのであるが、奥羽山脈側から俯瞰するとより明瞭に理解できる。

鹿角盆地の東に連なる奥羽山脈の四角嶺(1,003m)や独鉢森(836m)などから派生する末端の段丘群は、花輪から毛馬内にかけては西(米代川方向)に向って樹枝状を呈している。地羅野館を包括する樹枝状、すなわち舌状台地は、その基部から先端に向って軽石流堆積物(TW I p)、関上段丘(SE)、鳥越段丘(TO)などの十和田火山起源の噴出物で構成される。この内、地羅野館は先端部の鳥越段丘面に立地しており、西側眼下には沖積地を挟んで米代川が視認できる。

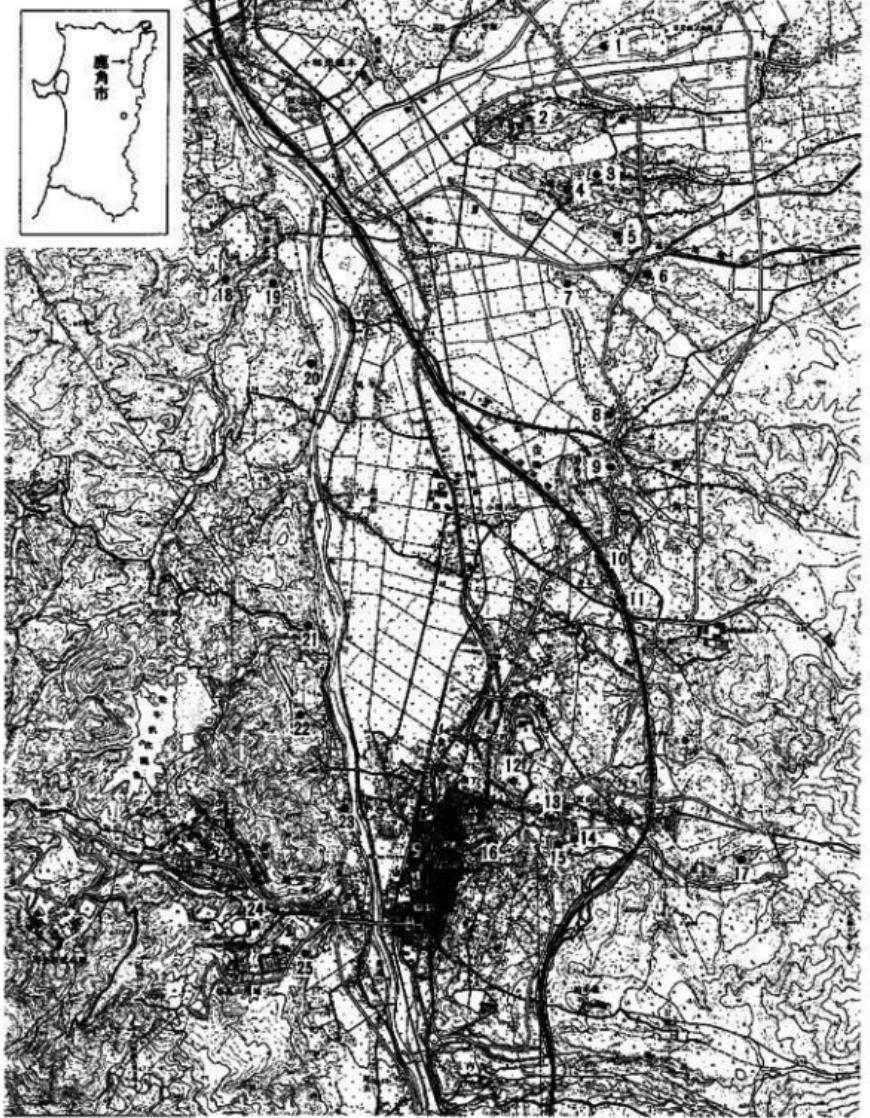
地羅野館跡の調査前の状況は、畠地、果樹園である。標高は郭上面で154m、郭東側下面147m、郭西側下面144m、その比高差7~10mである。

2. 地羅野館跡とは

地羅野館跡は、中世の城館跡の1つである。しかし館名については「鹿角四十二館」もしくは「四十八館」などに記載なく、所在する小字名により館(遺跡)名を定めている。ただ『鹿角由来記』に「中柴内村、中柴内八郎領知、本名阿保也、柴内彌治郎一門、館有」とあり、これが地羅野館にあたるものとも考えられる。

『鹿角の館(5)』に報告されている「地羅野館跡」によると同館は、少なくとも三つの郭があったとみられるが、第Ⅰ郭を残し、土取り等により消滅している(第3図スクリーン・トーン部分)ので不明な点が多く、鹿角市内の館の中でも規模が小さく、村地頭の屋敷地といった感じであると記されている。

館跡は、奥羽山脈裾野から伸びた段丘の先端部に空堀を掘って分離し、3つの郭を構築している。館跡の規模は、南北250m×東西200mである。館跡の範囲は、台地先端を通る県道大湯花輪線とこれより枝分かれして万谷野に通ずる農道によって区画されており、南側には柴内館を



第1図 地羅野鉄跡の位置と周辺の道路



第2圖 調查區位置圖

望み、西側は鹿角盆地を広く眺望できる。

第Ⅰ郭

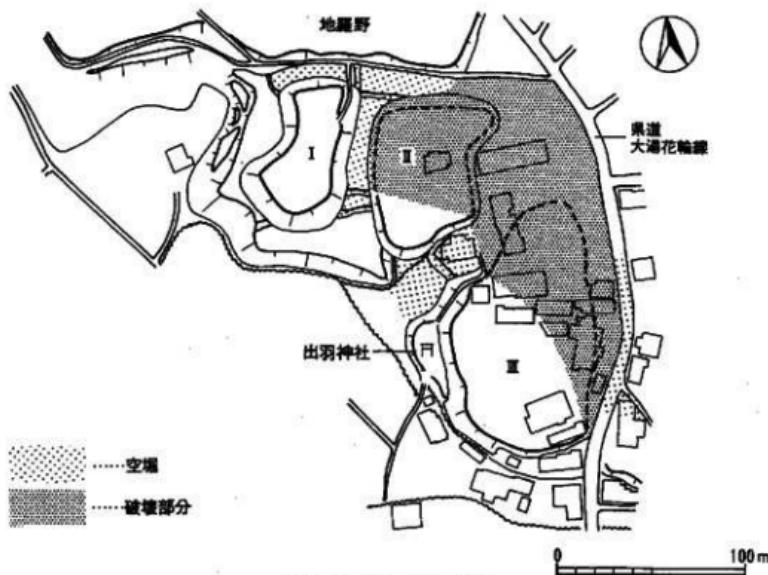
館跡の北端に位置する郭で、本郭南半分が今回の発掘調査地である。これまで、唯一原形を留めていた郭である。郭の面積はおよそ1,800m²を測り、標高154mである。北側に位置する台地、第Ⅱ郭とは空堀によって区切られている。郭東側には上面から7mほど下がってかすかに犬走り施設が確認される。西側斜面中段には幅3mほどの平場があり北側に行くにしたがって幅を広げ、郭北側にある空堀と一体化する。

第Ⅱ郭

館跡中央に位置する郭で、第Ⅰ郭、第Ⅲ郭と北側台地とは空堀によって区画されている。本来は一部が突き出た方形を呈する形であったものと推定されているが、数度にわたって行われた土砂採取、削平によって原形をほとんど留めていないが、南側においてその一端を垣間見ることができる。郭の規模は3,500m²を測るものと推定されている。

第Ⅲ郭

館跡の南端に位置する。第Ⅱ郭同様土砂採取、削平によって原形をほとんど留めていないがやはりその面影を南側で垣間見ることができる。同郭も東側の台地と第Ⅱ郭と空堀によって区



第3図 地羅野館現況図

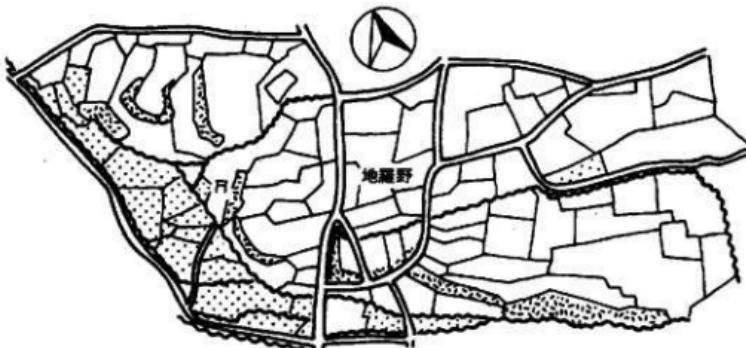
画されていたものと考えられ、県道部分が空堀であったのかもしれない。「鹿角の館(5)」においてほぼ方形を呈する郭ではないかと推定しているが、北側へ広く延びていた可能性が切絵図(第4図)で看取される。本郭西側中段平場には出羽神社が鎮座している。

3. 周辺の遺跡(第1図、第1表)

秋田県内では3,900ヶ所以上の遺跡が周知されている。この内、実に一割強の410ヶ所以上の遺跡が鹿角市内に分布しているのである。

市内において過去発掘調査された遺跡は、およそ71ヶ所に及んでいる。これらの多くは東北縦貫自動車道建設事業に伴うことから、鹿角盆地東側に集中していた。しかし昭和61年から調査が実施された西山農免農道の建設に伴う発掘を契機として、調査遺跡は市内全域に広がってきてている。ここでは、第1図に示した図幅中に所在する主に平安～中世の遺跡を一覧表の形で表することにする。

(高橋 学)



*明治22年調査の地籍図をもとに
作成したものである

第4図 地羅野館周辺切絵図

No.	遺跡名	時代・遺構・遺物	No.	遺跡名	時代・遺構・遺物
1	一ツ森館跡	中世	14	孫右工門館	中世・竪穴住居跡
2	小枝指館跡	中世・竪穴住居跡・陶磁器	15	下沢田	平安・竪穴住居跡
3	小平館跡	中世	16	花輪館跡	近世・竪穴遺構・陶磁器
4	新斗米館跡	中世・竪穴住居跡・陶磁器	17	赤坂B	縄文・平安・竪穴住居跡
5	高市向館跡	平安、中世・竪穴住居跡	18	太田谷地	平安・竪穴住居跡
6	高市館跡	中世	19	高屋館跡	縄文、中世・配石遺構
7	万谷野館跡	中世・竪穴遺構	20	花輪茶臼館	中世
8	地羅野館跡	中世・竪穴住居跡	21	高瀬館跡	中世・竪穴遺構・陶磁器
9	柴内館跡	中世	22	塔忍沢	平安・竪穴住居跡・製鉄炉
10	乳牛館跡	中世・竪穴遺構	23	かいぬま館	中世
11	妻の神館跡	中世・竪穴住居跡	24	茶臼館跡	中世
12	黒土館跡	中世	25	上山館跡	中世
13	花輪古館跡	中世・竪穴住居跡・陶磁器			

第1表 遺跡一覧表

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

地羅野館跡は、鹿角市花輪字地羅野に所在する中世の館跡である。平成3年5月、鹿角市建設部建設課より鹿角市教育委員会に、国道282号線と県道大湯花輪線を結ぶ市道「市役所東町線」建設計画が示された。この計画には唯一残存していた地羅野館跡第1郭の1/2が含まれるために、文化財保護法上の対応が必要であることを説明、本事業が市町村道路代行事業として秋田県が事業主体となることから、鹿角土木事務所、秋田県教育委員会、鹿角市建設課、鹿角市教育委員会の関係機関が協議を重ねることとなった。

同年6月4日、上記関係機関職員が、現地視察後協議し、1. 鹿角市教育委員会が試掘調査を実施し、本調査に要する経費、期間等を算定する。2. 本調査は平成4年度とし、調査終了後工事を行うように計画変更を試みる。3. 調査費は県が負担し、調査は秋田県教育委員会と鹿角市教育委員会が協力して行う。こととなった。

6月7日、鹿角市教育委員会が実施した試掘調査では、古代～中世の竪穴住居跡、竪穴造構6軒、土壙5基他が検出され、郭上面対象地のほぼ全域の調査が必要であることが確認された。

この調査結果を基に、関係機関と協議を重ねたところ、秋田県と鹿角市が委託契約を結び、鹿角市教育委員会を調査主体者、社会教育課（現 生涯学習課）を調査担当者とし、市専門職員と県より派遣される専門職員とで調査および整理・報告書作成等を行うことで合意した。

調査は、工事の関係で、雪の残る平成4年4月13日より開始した。

2. 調査要項

1. 遺跡名 地羅野館跡

2. 調査地 秋田県鹿角市花輪字地羅野13番地ほか

3. 調査対象面積 1,700m²

4. 発掘調査面積 1,190m²

5. 調査期間

発掘調査 平成4年4月13日～5月20日

整理・報告書作成 平成4年5月21日～6月12日

平成5年2月22日～3月31日

6. 調査主体者 鹿角市教育委員会

7. 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課

高橋 学（秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事）

秋元 信夫（鹿角市教育委員会生涯学習課 主任）

8. 事業主体者 秋田県

9. 調査参加者

調査指導員 熊谷 太郎（秋田県教育庁 文化課 学芸主事）

調査員 安村 二郎（鹿角市史編さん委員）

鎌田 健一（秋田県立十和田高等学校 教諭）

成田 典彦（鹿角市立花輪第一中学校 教諭）

三ヶ田俊明（鹿角市立中淹小学校 教諭）

藤井 安正（鹿角市教育委員会生涯学習課 主事）

調査補助員 花海 義人、黒川 智、柴田 純理

作業員 児玉 直美、安保謙太郎、児玉喜代治、佐藤 文作、安保 久作

安保 与一、山口 貞作、児玉吉二郎、小館権太郎、児玉 秀春

小田切末吉

池田 サナ、木村 ツル、木村 ソワ、木村 ハル、木村 テル

石田 タミ、木村美枝子、村方キユミ、高村 サツ、金沢 ミサ

金沢 チエ、金沢 クニ、金万 イク、金万 ワカ、木村 キサ

金沢 秀子、石川 紗枝、金万ナツエ、関 キオ子、金沢 タキ

兎沢 スエ、豊田 ナミ、関 アイ、豊田 キエ、豊田 リサ

小鳴 テイ、木村 ツギ、石川国江子、木村 泰子、兎沢 ミオ

10. 生涯学習課

課長 川又 節三（文化史跡整備室長兼務）

課長補佐 小笠原 昇

主任 秋元 信夫（調査・庶務担当）

免澤 精子（庶務担当）

主事 藤井 安正（調査担当）

臨時職員 古川 孝政

11. 調査協力機関・協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、鹿角土木事務所

金沢大学、奈良教育大学、柴平児童館

米田与一、黒沢雄一郎、倍賞省三、小館 博、山本喜三、関 義美

3. 調査の方法

調査区内のグリッド設定については、市道建設予走路線内の中心杭を利用した。

任意の中心杭2点を結ぶ直線とその延長線を基線として、これに直交する線を設定し5m×5mのグリッドを組んだ。グリッドの名称は、東西ラインに算用数字、南北ラインにアルファベットを付し、南東杭の両者の組合せでA-1グリッドのように呼び、名称とした。また、トレーニングの設定についてはグリッド杭を利用した。

発掘作業は、手掘りによる分層発掘とし、できるかぎり上面での遺構確認に努めた。

遺構の番号は、種別、発見順に付したが、精査の結果、遺構と認めがたいものについては欠番とした。なお、報告書作成の際に遺構番号を変更したものもある。

遺構の精査については、竪穴住居跡では4分割法、土壇では2分割法を用いたが、空堀、溝状遺構については任意の方法をとった。遺構の実測についてはグリッド杭を使用しその大きさに即した簡易やり方測量を用いたほか、平板測量をも使用した。竪穴住居跡、土壇については1/20の縮尺、その他のものについてはそれに即した縮尺を使用した。

遺物の取り上げについては、遺構内のものは遺物番号を付し、出土地点、レベル測量を行い採取した。遺構外のものについては、各グリッド、出土層位ごとに一括して採取した。

写真撮影は、実測図同様に記録保存の要であることから、調査の進行状況ごとにモノクロ、リバーサルフィルムに収めた。

4. 調査の経過

発掘調査は、平成4年4月13日から開始した。

4月13日、作業員への事務連絡、作業説明を行う。調査に先立ち雑木の片付け、環境整備、翌日から郭東側空堀、郭東側斜面表土除去作業を開始する。空堀の存在の予想される地域には廃材などの投棄がみられ作業は難渋する。4月21日から、調査は郭上面に移り、表土除去、遺構確認作業を行い、相次いで竪穴住居跡、土壇等が確認された。また、東側において確認された空堀についてはサブトレーニングを設定した。4月23日より遺構の精査を開始、隨時平面図実測、写真撮影を行う。5月に入り、郭上面では竪穴住居跡、土壇のはか所狭しと柱穴状ピットが確認され精査に追われる。これと前後して郭西側の中段平坦地および斜面の表土除去を開始する。中段より流れ落ちる溝状遺構と空堀・土壘を確認する。

5月中旬になり竪穴住居跡、竪穴遺構が相次いで完掘され、実測、写真撮影を隨時行う。

5月18日より実測図の補測、これと並行して危険箇所の埋め戻しを行う。

5月20日、郭の全景写真撮影、器材運搬を行い、発掘作業を終了した。

(秋元信夫)

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 遺跡の層序

遺跡の層序は基本的にはⅦ層に分層された。

- Ⅰ層 暗褐色土 (10YR3/3) 郭上面および東西斜面に堆積が見られる。郭上面では耕作土となっている。層厚20~30cmを測り、地山粒、シラス粒を多く含み褐色に近い色調を呈する地域も存在する。
- Ⅱ層 黒褐色土 (10YR2/3) 層厚40~20cmを測り、西側斜面中段から下位に堆積する。小礫、シラス粒を含む。
- Ⅲ層 褐色土 (10YR4/4) Ⅱ層と同様、西側中段から下方に堆積する。中段部分で層厚80cmと厚く、徐々に層厚を減少し水田面真近で消滅する。シルト質で小礫、シラス粒を多く含む。
- Ⅳ層 黒褐色土 (10YR2/3) 西側中段から下位に堆積する。中段部分では層厚20cmを測るが下位に行くにしたがって層厚を増し最大で130cmを測る。本層は小礫、混入土の量、色調の若干の違いによってさらに細分することができる。
- Ⅴ層 灰白色土 (10YR8/1) 鳥越火山灰層と呼ばれるシラス層で層中に白色~灰白軽石を多量に含む。郭上面においては本層上面で遺構が確認される。郭上面の一部において黄色を呈する火山灰層（申ヶ野火山灰層）の薄い堆積が見られる。
- Ⅵ層 暗褐色土 (10YR3/3) 廃材などが混入しており、本来基本層序として認定できないが東側に存在する空堀を広く覆うことから層序内に含めた。

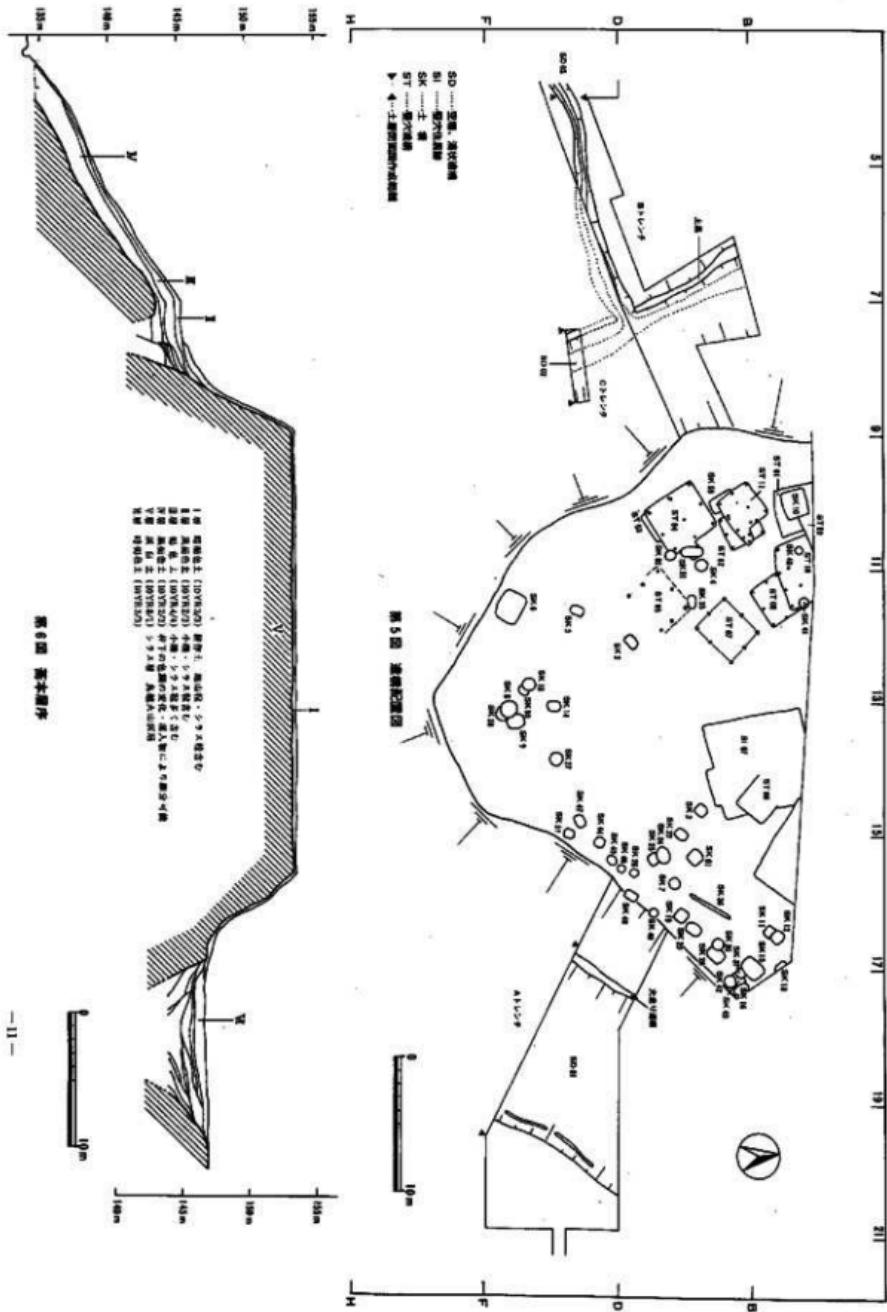
(秋元信夫)

2. 郭上面調査区の遺構と遺物

郭（第Ⅰ郭）上面において検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、竪穴遺構11基、土壙44基、Tピット1基、柱穴状ピット多数である。これらの遺構は、遺構内出土遺物がなく時期が不正確なものもあるが、概ね竪穴住居跡は平安時代、竪穴遺構は中世、土壙及び柱穴状ピットは平安~中世、Tピットは縄文時代の構築と見ている。

遺構の分布は、一見すると種別毎に排他的な配置を示しているようにも伺える。すなわち調査区の中央寄りに竪穴住居跡、西寄りに竪穴遺構、南端で列状の配置をなす土壙群である。

遺構の確認面は、いずれも地山面であり、個々に記載はしない。なお、確認時に番号を付した遺構で、その後の精査によって遺構でないと判断された遺構番号はこれを欠番としている。



(1) 壁穴住居跡

調査区は中央で2軒確認した。2軒とも住居の一部ないしは大部分が調査区外に及んでいる。出土遺物から平安時代の構築と考えている。

第3号壁穴住居跡SI 03 (第7図、PL 6)

調査区中央東、B-14-16グリッドで確認した。住居の大部分は調査区外に延びる。またS I 07と重複し、これを切っている。平面形は方形を基調とすると想定され、南西部の壁長6.8m、南東部壁長は4m以上である。住居内には壁から30~60cm内側に幅25cm前後、深さ12~24cmの溝が巡っている。確認面から床面までの深さは15cmである。堆積土は柱穴状ピットの堆積土を除いて5層である。床面は比較的大きな起伏が認められるものの堅く締まっている。床面上には焼土の分布は観察できるが、カマドは調査範囲内では確認できなかった。

柱穴は、明らかに住居より新しいものもあるが、大部分はその帰属が明らかではない。ただ掘り方をもつP 1・2は本住居の主柱穴と考えられる。径50~55cmの円形の掘り方内に径16cm (P 2)、径20cm (P 1) の柱痕跡が確認できた。

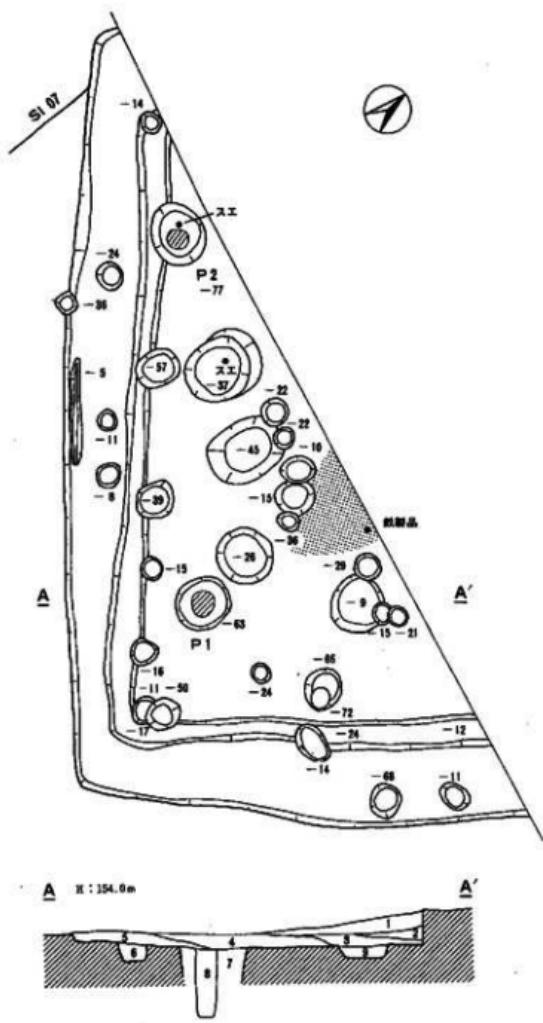
出土遺物は、須恵器破片3点(同一個体)、土師器、石器・剣片2点、鉄製品がある。第24図1はP 2掘り方内出土の大甕である。外面には平行タタキ、内面には丸石状のアテ具を消すようなナデが認められる。胎土には白色系の砂粒を比較的多く含んでいるが、焼成は極めて良好である。1と同一個体の第28図2は胎土分析の結果、北陸地域からの搬入品の可能性が指摘された。3は把手付土器の把手部分である。中空タイプで、第25図15に示した把手と形、法量は近似する。ただ全体的な作りは15よりやや稚拙な感がある。第26図1は、北側床面直上出土の黒色頁岩質の叩石である。2は瑪瑙質の剣片である。第27図1は、堆積土上層で出土した種別不明の鉄製品である。SK 29出土の6と同形とも思われるが不明。

第7号壁穴住居跡SI 07 (第8図、PL 6)

調査区中央部、B・C-13・14グリッドで確認した。SI 03、ST 06と重複し、両者に切られている。規模は、長軸7.5m、短軸7.2mの南北方向にやや長い方形を呈する。南壁中央東寄りに幅3m、奥行き0.7mの長方形の張り出しをもつ。周壁には張り出し部を含めて幅20cm前後の壁溝が巡る。溝は西壁の一部で幅10cm未溝の部分もある。壁溝の床面からの深さは15cm~36cm、張り出し部では10cm前後である。

カマドは、南壁西寄りに認められる。ただし幅65cm、奥行き50cmの火床面が残っていることと、壁溝を埋めた後にカマドを構築していること以外は明らかにできなかった。

堆積土は基本的には1層で、黒褐色土(2層)が広がっている。同層中には大きく2ヶ所で白色粘土が薄く入り込んでいる。住居北東部の分布域下の床面は焼けて堅くなっていた。



- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒少量含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 疊く縮まる。地山粒1層より多く含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 地山粒微量含む
- 4 黑色土 (10YR2/1) 地山粒・小プロック多く含む。疊く縮まる
- 5 黑色土 (10YR2/1) 地山小プロック多く含む。プロックは4層より大きい
- 6 黑色土 (10YR2/1) 地山粒少量含む。縮まり弱、柱穴跡
- 7 黑褐色土 (10YR2/3)
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) 縮まり弱
- 9 黑褐色土 (10YR2/3) 地山粒・小プロックや多く含む

第7図 第3号竪穴住居跡実測図

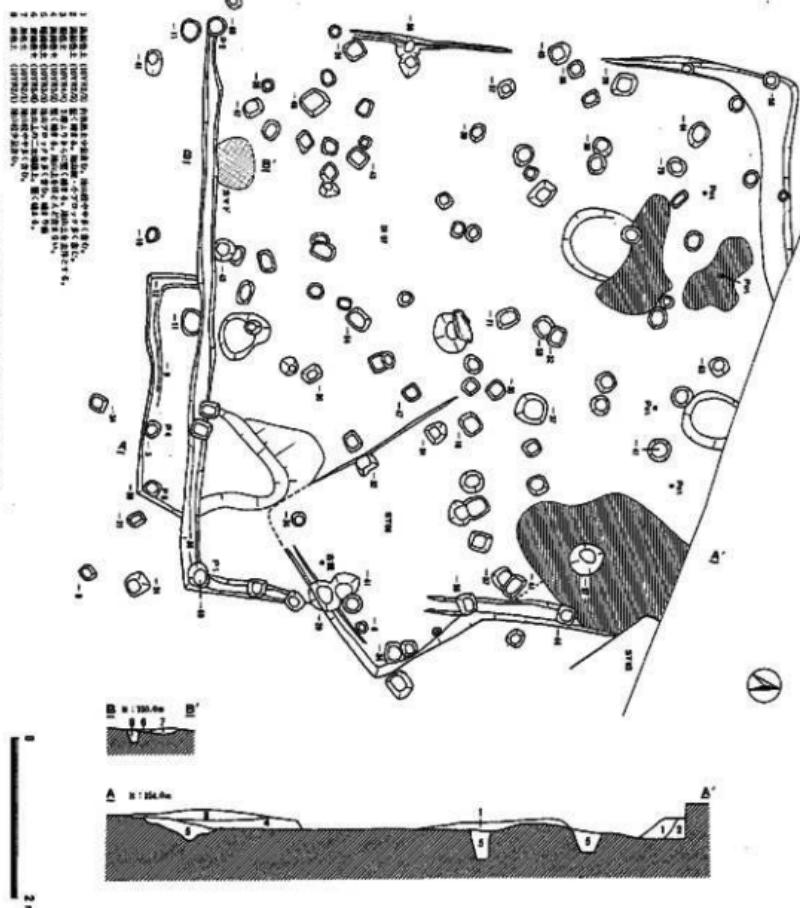


图 92 第7号窑穴剖面、第6号窑穴平面图

床面上の施設としては、南壁東寄りに地山土を二次的に盛っている箇所が存在する。これは張り出し部と併せて出入口施設としての機能を果たしていたと想定できる。当地方における該期の一般的な出入口施設は、住居外に緩いスロープを掘りだしている例が多いが、ここでは住居外への張り出しと住居内にも緩いスロープを作り出す方法を採用している。断面図で観察すると、まず壁際の溝を5層土で埋める。次いで地山土を殆ど含まない黒褐色土（4層）を盛り、叩き締める。最後に地山土を主とする粘土（3層）をその上に貼り、叩き締めている。最終的には幾らか掘り下げていた張り出し部分も埋めている。その形状は舌状を示し、幅約1.4m、奥行き1.5m程度である。これらの土、特に3・4層土には土師器破片が比較的多く含まれており、作為的な混入の可能性も考えられる。

また床面上には、一辺あるいは径が20cm～30cmの方形あるいは円形の柱穴が多数見られる。配置から南壁両端の隅柱（P1・2）は問題ないであろうが、その他は明確ではない。

出土遺物は、土師器、縄文土器があり、本調査における遺物総量の内の約1/3を占めている。遺物は、2ヶ所の白色粘土分布内、出入口施設内（3・4層）に集中する。

土師器甕は、口縁部で観察する限り次のタイプが認められる。すなわち口縁部が先細りし緩く外傾するもの（第24図4など）、短く外反する口縁端部を丸くおさめるもの（9など）、ほぼ直立気味に立ち上がるるもの（10、11）、先細りの口縁部がやや内傾するもの（12）などバラエティーに富む。底部では筐状（?）の圧痕の見られるもの（13）、無文（ナデ）のものがある。胴部では縦位の粗いケズリを施すものが多い。一部には外面に煤状炭化物の見られるものもある。縄文土器も2点出土している。また珪化木も1点出土している。

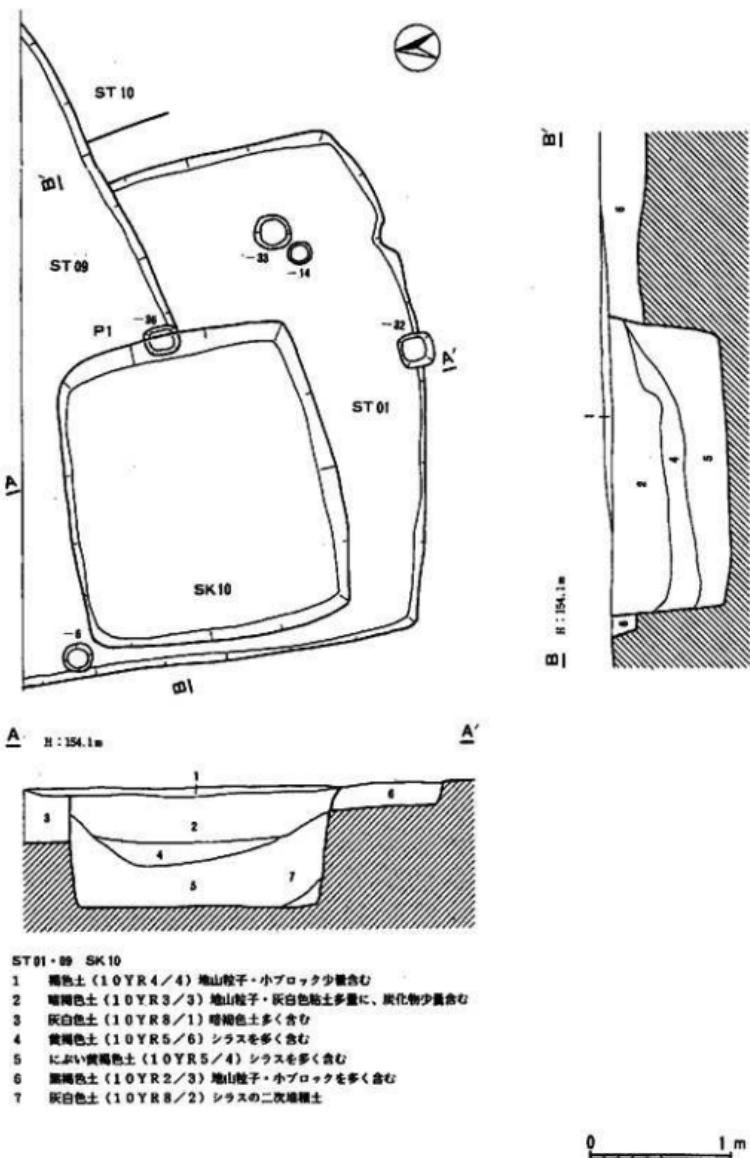
（2）竪穴遺構

竪穴遺構は11基確認しているが、1基（ST06）以外は調査区北西部でほぼ方向を一にして集中している特徴を導きだせる。

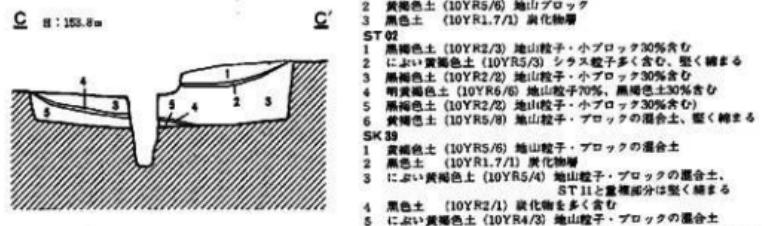
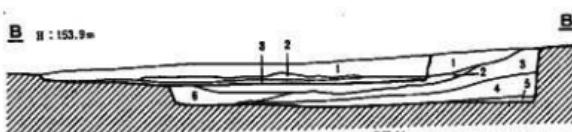
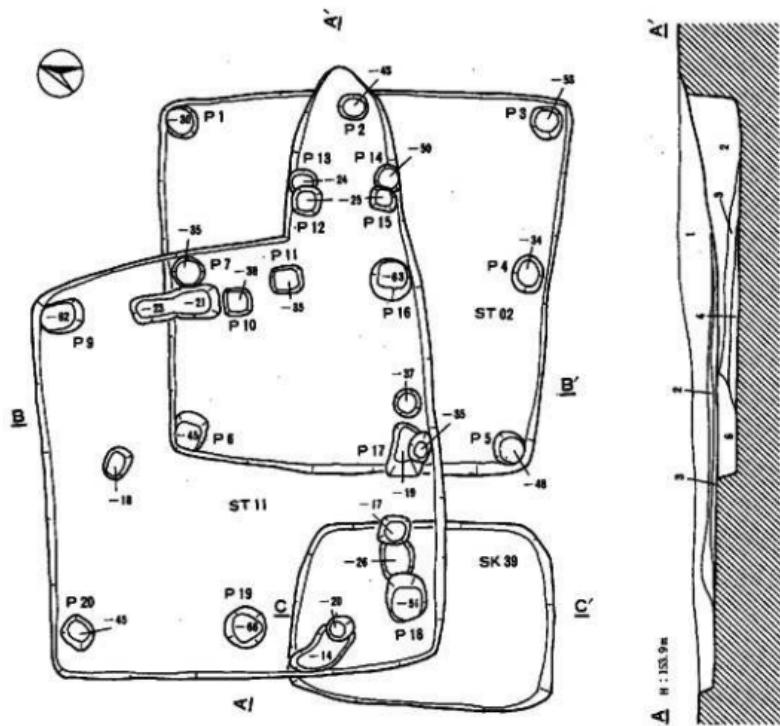
第1号竪穴遺構ST01（第9図）

調査区北西部、B-9・10グリッドで確認した。ST09・SK10と重複し三者の関係は、⑩ ST01→ST09→SK10（新）である。また竪穴の北半分は調査区外に延びている。規模は、東西方向の長さが3.55m、南北長が3m以上の方形ないしは長方形を呈すると思われる。深さは18cmで、特に東側の床面は堅く締まっている。ST01東壁とST10西壁は僅か40cm前後の間隔しかなく、両者が同じ方向性をもって並立しているように見える。なお、本竪穴は明瞭に柱穴配置が伺えず、他の竪穴とは性質が異なるのかもしれない。

遺物は堆積土中位より、縄文土器が1点出土した。第25図4は、緩やかな山形口縁の頂部に刻目が入っている。



第9図 第1号・9号竖穴造構、第10号土壤実測図



第10図 第2号・11号竪穴遺構、第39号土壤実測図

第2号竪穴造構ST 02 (第10図、PL 7)

調査区西側、B・C-10グリッドで確認した。ST 11と重複し、これに切られる。規模は長軸2.8m、短軸2.75mの方形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、その深さは45cmである。堆積土は6層に分けられる。床面は細かな起伏が認められるが、比較的堅く締まっている。柱穴は各壁隅とその中間に位置するが(P 1~7)、西壁中央部の柱穴は確認できなかった。各柱穴は、径20cm前後の円形を呈し、床面からの深さは30~53cmである。遺物は出土しなかった。

第3号竪穴造構ST 03 (第11図、PL 7)

調査区西側、D-9・10グリッドで確認した。ST 04と重複し、これに切られる。規模は南壁を残して破壊されているため明確ではないが、四隅の柱穴(P 1~4)から推定して長軸は2.8m、短軸は2.25mの長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは25cmである。堆積土は2層に分けられる。僅かに残る床面は軟弱である。

4本の柱穴のうち、P 1以外はST 04柱穴により大部分が破壊されているが、円形を基調とする掘り込みと思われる。P 2・3は床面からの深さ51cmを測る。遺物は出土しなかった。

第4号竪穴造構ST 04 (第11図、PL 7)

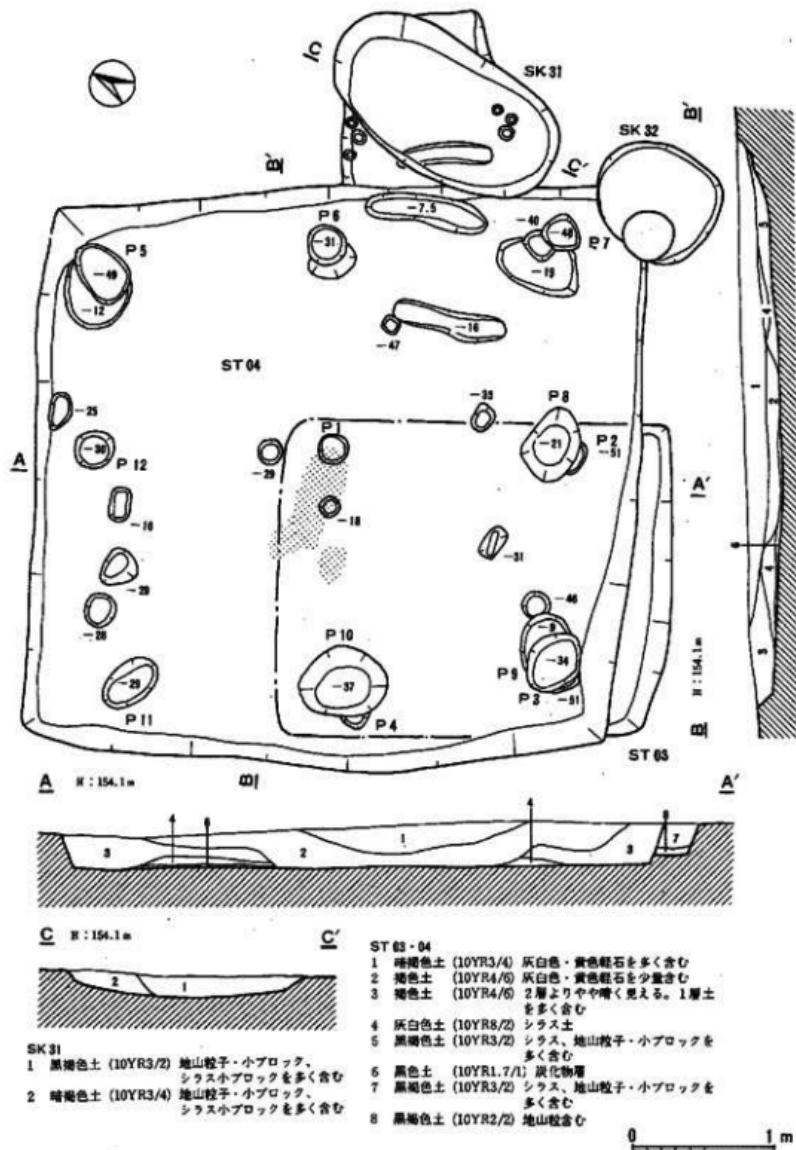
調査区西側、C・D-9・10グリッドで確認した。3造構と重複し、(旧) ST 03→ST 04→SK 31・32(新)と整理できる。規模は、長軸4.3m、短軸4.1mの方形を呈し、これに東側壁面の中央より南側に幅、奥行きとも1.3mの方形の張り出しが伴う。張り出しあは竪穴内に向って緩く傾斜している。張り出し部の二辺には径10cm前後、深さ13~17cmの小柱穴がそれぞれ3本(計6本)取り付く。確認面からの深さは32cmである。堆積土は7層に分けられる。自然堆積と想定される。6層は炭化物層である。また張出し部から竪穴内にかけては、長軸方向と平行するように長さ70~85cm、幅15cm前後、深さ8~16cmの浅い溝が3本認められる。いずれも本造構に伴う施設と考えている。

床面は細かな起伏が見られるものの堅く締まっている。また床面ほぼ中央には焼土の分布が認められる。床面積は15.67m²である。柱穴は各壁隅とその中間に計8本(P 5~11)配置されている。柱穴掘り方は、他の竪穴に比較して大きく、P 10は65cm×50cmの土壠様である。床面からの深さは、最も深いP 8の21cmから最も深いP 5の49cmまでである。

遺物は、堆積土中より縄文土器が1点(第25図5)出土している。

第5号竪穴造構ST 05 (第12図、PL 8)

調査区北西部、C・D-11グリッドで確認した。SK 33と重複し、僅かに立ち上がる壁の一



第11図 第3号・4号竪穴造構、第31・32号土壌実測図

部を切られている。規模は、南側の壁を検出できず、北西面の柱穴間（P 6-1）の距離で計測すると3.45mとなる。柱穴のうち、P 2・5内には、長さ15cm程の板状の礫が入れられている。この2本の柱穴は径30~35cmの円形を呈する。P 7を除く他は、円形を基調とし径15~20cm、P 7は方形で一辺20cmである。確認面からの深さは33~34cmである。礫以外の遺物は出土しなかった。

第6号竪穴造構ST 06 (第8図、PL 6)

調査区中央東、B・C-14グリッドで確認した。SI 07と重複し、これを切っている。北西一南東に主軸をとる長方形と思われるが、北西部の壁を確認できなかった。現存する長軸2.8m、短軸は2.55mである。堆積土は1層で、深さは10cmである。南東壁直下には幅10cm、深さ4cmの壁溝が認められる。柱穴は、重複するSI 07柱穴との判別が必ずしも明らかではないが、一辺25cm前後の方形の柱穴が各隅とその間には、長軸壁下には各2本、短軸壁下に各1本の計10本を基本としているようである。なお、方形の柱穴はSI 07内にもまだ存在し、別の造構(竪穴造構あるいは掘立柱建物跡など)があった可能性も記しておく。

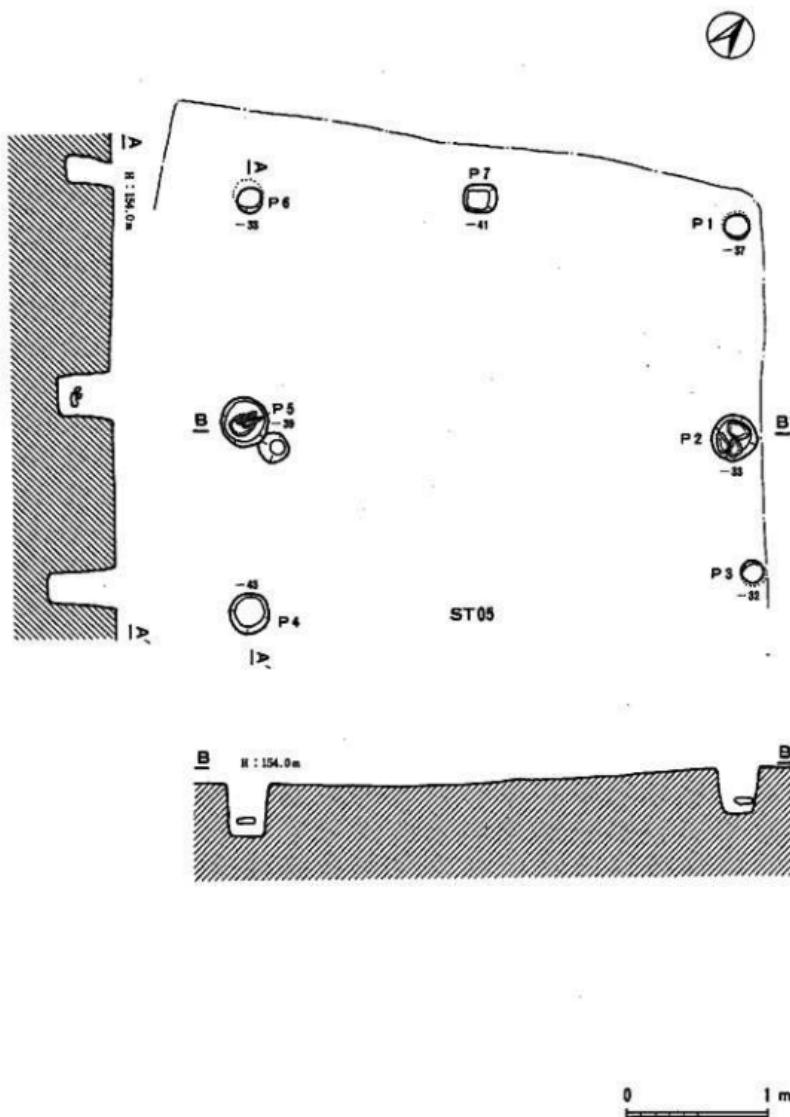
遺物は、土師器甕小破片1点、銭名不明の古錢が1点出土している。第27図2は、床面出土で径25mm、重さ3.0gである。

第7号竪穴造構ST 07 (第13図、PL 8)

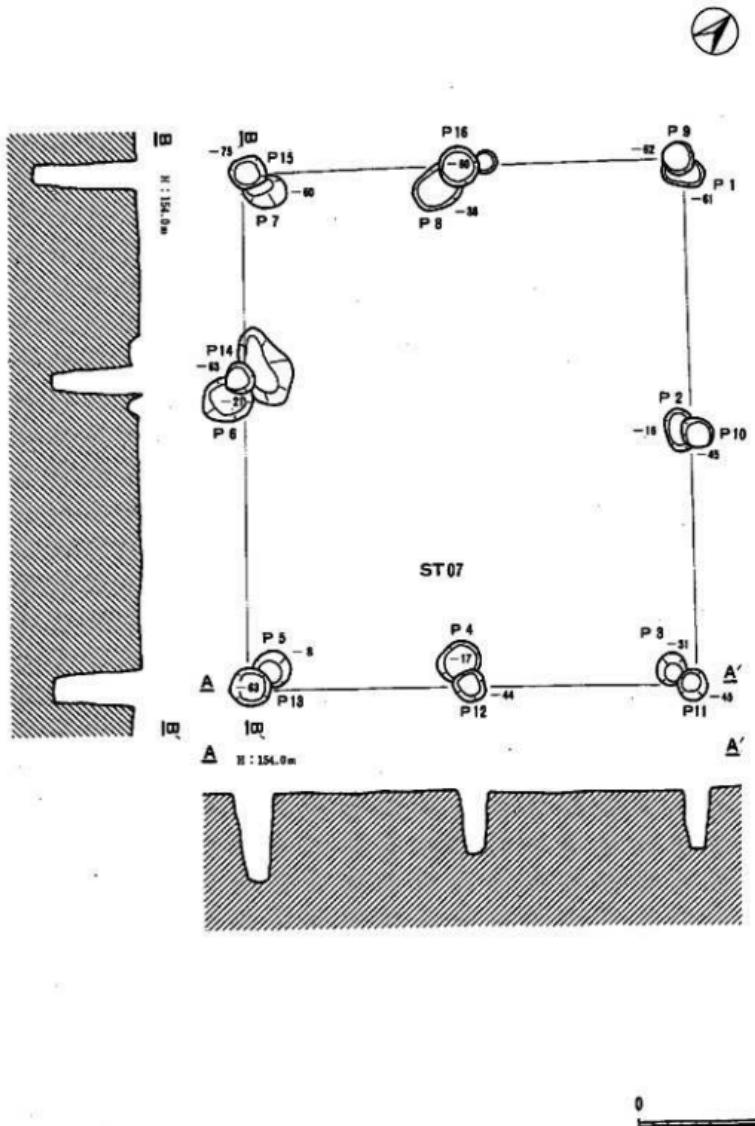
調査区北西部、B・C-11・12グリッドで確認した。上面を削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかった。従って掘立柱建物跡の可能性も残る。柱穴どおしの重複から2時期を想定できる。旧期をST 7-A (P 1~8)、新期をST 7-B (P 9~16)とする。柱間距離は、AでP 1~3間3.55m、P 3~5間2.85m、P 5~7間3.45m、P 7~1間3m、BでP 9~11間3.75m、P 11~13間3.15m、P 13~15間3.2m、P 15~9間3.05mとなり、AからBへの建て替えで規模を拡大している。それぞれの柱穴は、径20~30cmの円形を基調とする。確認面からの掘り込みは、A期11cm~60cmで平均27cm、B期12cm~75cmで平均51cmとなり、B期に深く掘り込みを行っている。柱穴内から遺物は出土しなかった。

第8号竪穴造構ST 08 (第14図、PL 8)

調査区北西部、B-11グリッドで確認した。ST 10・SK 41と重複し、両者に切られている。さらに畑耕作に伴う深耕により西側の壁が削平され、規模は必ずしも明確にできない。しかし柱穴配置から、長軸推定3.1m、短軸3.1mの方形を示すと思われる。確認面からの深さは12cm程度である。堆積土は1層である。柱穴はP 1~8と想定され、各壁隅とその中間に配されてい



第12図 第5号竖穴造構実測図



第13図 第7号竖穴造構実測図

る。径20~30cmの円形を呈し、確認面からの深さは11~63cmとばらつきがある。床面はやや大きな起伏が認められる。床面ほぼ中央には焼土（推定1.05m×0.55m）が分布している。遺物は出土していない。

第9号竪穴遺構ST 09（第9図）

調査区北西部、B-10グリッドで確認した。竪穴の大部分は調査区外であり、南側壁の一部を検出したに過ぎない。3遺構と重複し、(IB) ST 01・10→ST 09→SK 10（新）と整理できる。確認面からの深さは22cmである。柱穴はその位置からP 1を候補としておきたい。遺物は出土していない。

第10号竪穴遺構ST 10（第14図、PL 8）

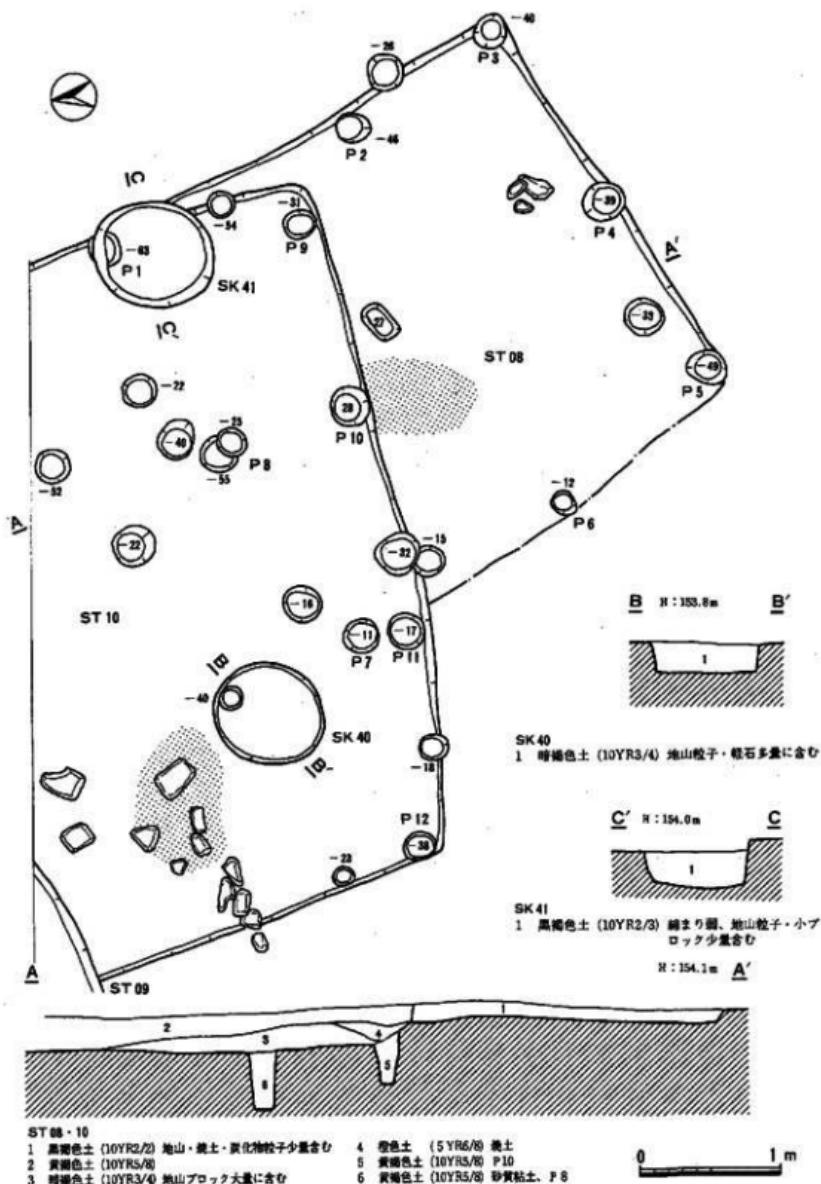
調査区北西部、B-10・11グリッドで確認した。竪穴北半分は調査区外に延びている。4遺構と重複関係にあり、SK 40との新旧は不明であるが、(IB) ST 08→ST 10→SK 41・ST 09（新）となる。ST 08同様規模は明確ではないが、東西の長さは5m、これに直交する軸長は3m以上となり、方形あるいは長方形になるであろう。確認面からの深さは28cmで、床面は細かい起伏が見られるが堅く締まっている。西壁寄りの床面には焼土（1.05m×0.6m）の分布が見られる。柱穴は、南壁直下にほぼ等間隔で4本（P 9~12、径20~30cmの円形、深さ17~38cm）配されそうであるが、それ以外は不明確である。

遺物は、西壁沿いの堆積土中より拳大~人頭大の自然礫が10数点まとまって出土している。

第11号竪穴遺構ST 11（第10図、PL 7・9）

調査区西侧、B・C-9・10グリッドで確認した。ST 02及びSK 39を切っている。規模は、長軸3.15m、短軸2.8mの方形を呈し、東壁南端に幅0.9m、奥行き1.2mの舌状の張り出しを伴う。張り出しは竪穴に向って緩く傾斜している。確認面からの深さは28cmである。堆積土は3層に分けられる。床面上には薄く炭化物の広がり（3層）が認められる。床面は重複する遺構部分では特に堅く締めている。床面積は7.9m²である。

柱穴はP 9~20が本竪穴に帰属する。柱穴掘り方は基本的に方形を意図していたと思われる。一辺は25cm前後である。床面からの深さは平均50cmにも達する。またP 12~15は張り出し施設に伴う柱穴と見られ、ほぼ同位置での重複が認められることから、張り出し部あるいは竪穴全体の建て替えが想定できる。遺物は出土しなかった。



第14図 第8号・10号豎穴造構、第40号・41号土壤実測図

(3) 土 塚

郭上面では44基の土塚を検出した。これら土塚は郭南端部で列状に配されている例が多いが、一部は西側の豊穴遺構分布区域にも認められる。また土塚どおしの重複、豊穴遺構との重複も見られる。時期的には出土遺物が見られない土塚も多く、大きく平安～中世と想定しているが、主体は中世かもしれない。なお、平面形態記載においては、長軸が短軸の1.1倍以内であれば円形ないしは方形、それ以上の場合は梢円形、長方形とし、各辺が直線的であれば（長）方形とし、丸味をもてば（梢）円形とする。（長）方形のうち隅が丸味をもてば隅丸（長）方形と記す。

第1号土塚SK 01 (第15図、PL 10)

調査区南東部、C-15グリッドで確認した。規模は、長軸1.05m、短軸0.94mの方形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、その深さ46cmである。堆積土は3層に分けられ、2・3層は人為的堆積である。底面は平坦である。

遺物は、堆積土下位出土の縄文土器2点である。第25図6は、口縁部資料で直角に整形された口唇部が特徴的である。LP縄文が施文されている。もう1点は無文である。

第2号土塚SK 02 (第15図、PL 10)

調査区中央西寄り、D-12グリッドで確認した。規模は、長軸1.08m、短軸0.84mの隅丸長方形を呈する。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、深さは10cmである。堆積土は1層であり、人為的堆積と想定している。底面中央部がやや窪むが、全体に平坦である。遺物には焼けた礫が出土している。

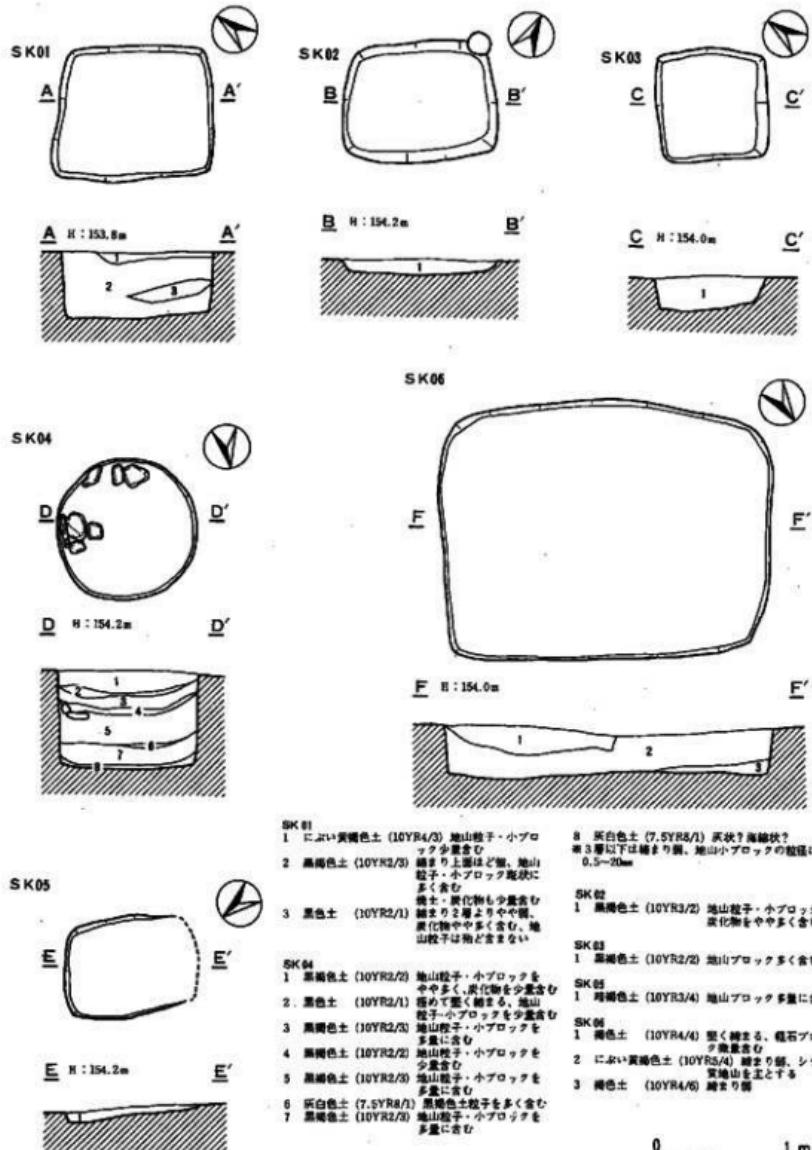
第3号土塚SK 03 (第15図)

調査区中央東寄り、C-14グリッドで確認した。規模は、一辺が0.8mの方形を呈する。確認面からの深さは24cmである。堆積土は1層であり、上層ほど堅く締まっている。SK 01と同質の堆積土である。東側底面がやや窪み、全体に小さな凹凸がある。

遺物は、土塚南東側の底面直上から土師器壺小破片2点、2～3cm角程の鉄滓が1点、剝片1点が出土している。剝片は、黒色頁岩を素材としている。また人為的な加工の痕跡は見られないが、小豆大の瑪瑙も剝片の側から出土している。

第4号土塚SK 04 (第15図、PL 10)

調査区北西部、C-10・11グリッドで確認した。位置的にはST 04の張り出し部に近接して



第15図 第1号～6号土壠実測図

いる。規模は、径1mの正円形を呈している。ほぼ垂直に掘り込まれ、その深さは70cmである。堆積土は8層に分層できる。2層は極めて堅く締まり、貼床(蓋)状を示す。最下8層は灰状、海綿状の物質が薄く堆積している。また5層上面には2ヶ所で板状あるいは棒状の礫がそれぞれ4点と3点検出された。いずれも火を受けた痕跡は認められない。

遺物は、1層より土師器2点、5層より鉄製品1点が出土している。第25図7は、先細りの甕口縁が緩く外傾しており、外面は縦位のケズリのち口縁部に横ナデ、内面も横ナデである。第27図3は刀子状の製品と思われるが詳細は不明である。

第5号土壙SK 05 (第15図)

調査区西部、E-11グリッドで確認した。規模は、南西部の壁立ち上がりが不明確であるが、長軸推定0.94m、短軸0.75mの隅丸長方形を呈すると想定される。深さは僅か8cmである。堆積土は1層で、底面には小さな凹凸が見られる。

遺物は堆積土上位で埠が1点出土している。第26図3は拳大の大きさに破損しており、元形状は不明である。厚さは5.7cmである。二次火熱を受けて黒褐色を呈している。

第6号土壙SK 06 (第15図、PL 11)

調査区南西端部、F-11グリッドで確認した。規模は、長軸2.35m、短軸1.85mの隅丸長方形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは38cmである。底面は中央部がやや盛り上がる。堆積土は3層に分けられる。主軸方位はN-54°-Wで、北西-南東方向の段丘崖線にほぼ平行する。遺物は出土しなかった。

第7号土壙SK 07 (第16図)

調査区南東部、D-15グリッドで確認した。東側の壁を確認できなかったが、推定長軸1m、短軸0.84mの楕円形を呈すると思われる。深さは10cmである。堆積土は1層、確認面で焼土ブロック、炭化物が見られた。遺物は出土しなかった。

第8号土壙SK 08 (第16図、PL 11)

調査区南西部、F-13グリッドで確認した。SK 09・38と重複し、その両者を切っている。規模は、長軸1.34m、短軸1.13mの楕円形を呈する。確認面からの深さは63cmである。堆積土は3層に分けられ、人為的と思われる。底面は平坦である。

出土遺物は、埠と鉄製品がある。第26図4は二次火熱を受けている埠である。厚さ10.5cm、現存する幅16.5cmを測る。鉄製品は小片で種別不明である。

第9号土壙SK 09 (第16図、PL 11)

調査区南西部、F-13グリッドで確認した。SK 08と重複し、これに切られる。規模は、長軸1.3m、短軸1.05mの整った橢円形を呈している。深さは22cmで、底面は平坦である。堆積土は2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

第10号土壙SK 10 (第9図、PL 11)

調査区北西部、B-9・10グリッドで確認した。ST 01・09と重複し、両者を切っている。規模は、長軸2.25m、短軸1.92mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは85cmになる。堆積土は4層に分けられる。底面は平坦で堅く締まっている。遺物は出土しなかった。

第11号土壙SK 11 (第16図、PL 12)

調査区南東部、B-16グリッドで確認した。SK 12と重複し、これを切っている。規模は、長軸0.75m、短軸0.66mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは21cmである。堆積土は1層で人為堆積か。底面は緩やかな起伏が見られ、堅く締まってはいない。遺物は出土しなかった。

第12号土壙SK 12 (第16図、PL 12)

調査区南東部、B-16グリッドで確認した。SK 11と重複し、これに切られている。規模は、長軸1.08m、短軸0.87mの隅丸長方形を呈する。深さは36cm、堆積土は1層である。人為的堆積と思われる。底面はほぼ平坦である。

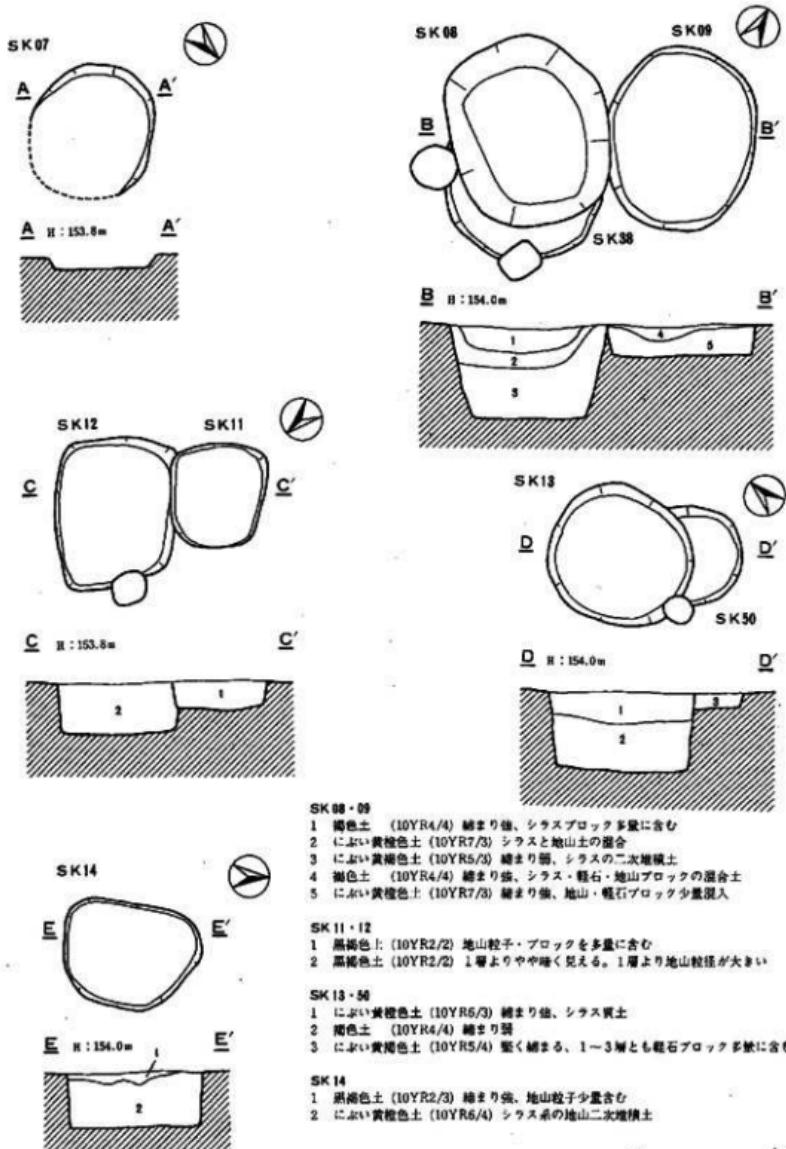
遺物は、確認面上で土師器破片1点が出土している。

第13号土壙SK 13 (第16図、PL 12)

調査区南西部、F-12グリッドで確認した。SK 50と重複し、これを切っている。規模は、長軸1.02m、短軸0.95mの円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、その深さは57cmである。堆積土は2層に分けられる。人為堆積であろう。遺物は出土していない。

第14号土壙SK 14 (第16図、PL 12)

調査区南西部、E・F-13グリッドで確認した。規模は、長軸0.98m、短軸0.74mの不整な橢円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、その深さは38cmである。堆積土は2層に分けられる。2層は地山土の二次堆積と見られ、僅かに炭化物・焼土を含んでいる。人為的堆積土であろう。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。



第16図 第7号～14号・38号・50号土壤実測図



第15号土壙SK 15 (第17図、PL 13)

調査区南東部、B・C-17・18グリッドで確認した。SK 37と重複し、これを切っている。規模は長軸1.7m、短軸1.42mの長軸壁がやや丸味をもつ隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは40cmである。堆積土は2層に分けられる。底面は細かな起伏が見られるものの堅く締まっている。

遺物は、底面直上で砾石、中位で土師器、鉄製品、鉄滓が出土している。第25図8は、焼成が極めて良好な甕口縁部資料である。形態、調整はSK 04の7と同じである。第26図5は4面を砥面とする棒状の泥岩質の砾石である。重量は115gである。第27図4は、厚さ3~4mmの板状の製品である。鉄滓は握り拳大で、重量345gである。

第16号土壙SK 16 (第17図)

調査区南東隅、C-17グリッドで確認した。壁の一部は調査区外に、またSK 43と重複し、これを切っている。規模は、長軸1.22m、短軸推定0.7mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは33cmである。堆積土は3層に分けられる。底面は細かな起伏が認められる。遺物は出土しなかった。

第19号土壙SK 19 (第17図、PL 13)

調査区北東部、C・D-16グリッドで確認した。規模は、長軸1m、短軸0.86mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは28cmである。堆積土は1層で、人為的堆積である。底面は細かな起伏が認められる。

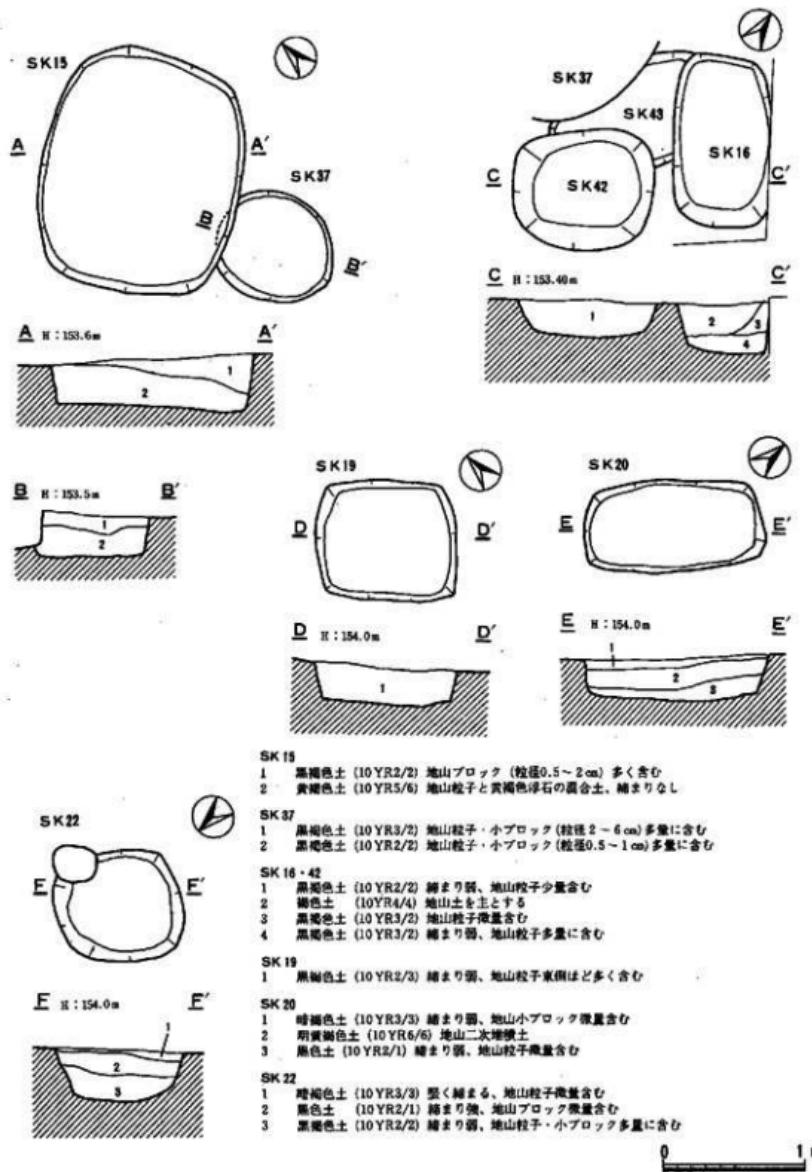
遺物は、堆積土北東側中位出土の古銭1点である。第27図5は、1368年を初鑄とする洪武通宝であり、径21.5mm、重さは2.6gである。

第20号土壙SK 20 (第17図、PL 13・14)

調査区北東部、C-16グリッドで確認した。規模は、長軸1.26m、短軸0.67mの隅丸長方形を呈する。深さは30cmで、堆積土は3層に分けられる。人為的堆積と思われる。底面には比較的大きな起伏が認められる。主軸方位はN-45°-Eであり、軸線は南に隣接するSK 19とはほぼ直交する位置関係にある。遺物は出土していない。

第22号土壙SK 22 (第17図)

調査区南東部、C-15、D-14・15グリッドで確認した。規模は、長軸0.9m、短軸0.78mの不整円に近い橢円形を示す。確認面からの深さは36cm、堆積土は3層に分けられる。底面は



第17圖 第15~22号、37号、42号、43号土壤实测图

比較的大きく起伏を見せる。遺物は、土師器甕が1点出土している。

第24号土壤SK 24 (第18図、PL 14)

調査区南東部、D-15グリッドで確認した。SK 25と重複し、これを切っている。規模は、長軸1.15m、短軸0.96mの橢円形を呈する。深さは25cmである。堆積土は2層に分けられ、人為的と考える。底面は細かな起伏が見られる。遺物は出土しなかった。

第25号土壤SK 25 (第18図、PL 14)

調査区南東部、D-15グリッドで確認した。SK 24と重複し、これに切られる。規模は、長軸0.85m、短軸0.76mの方形を呈する。深さは25cm、堆積土は1層、人為的である。遺物は出土していない。

第26号土壤SK 26 (第18図)

調査区南東部、D-15グリッドで確認した。規模は、長軸0.63m、短軸0.56mの隅丸方形を呈する。深さは10cmである。遺物は出土していない。

第27号土壤SK 27 (第18図、PL 14)

調査区南西部、E・F-13・14グリッドで確認した。柱穴状小ピット2基に切られる。規模は、長軸0.96m、短軸0.81mの隅丸方形を呈する。深さは16cmである。堆積土は1層である。底面は細かな起伏が見られる。遺物は出土しなかった。

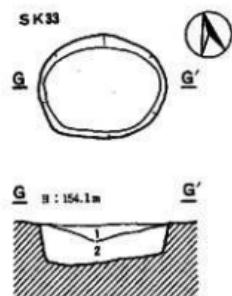
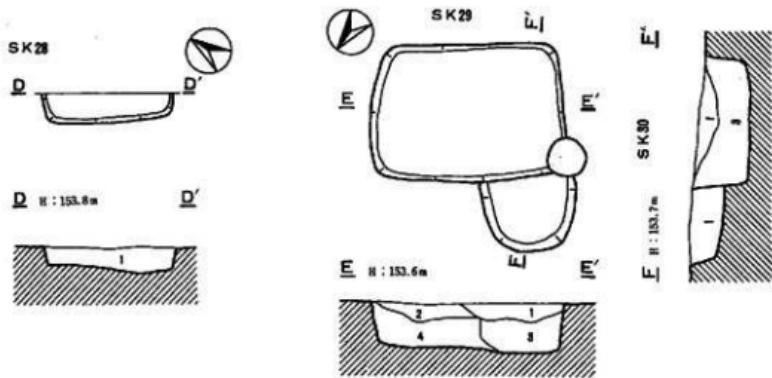
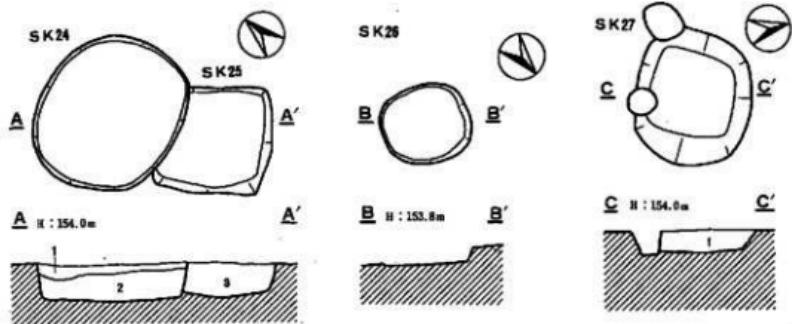
第28号土壤SK 28 (第18図)

調査区南東部、B-16・17グリッドで確認した。土壤の大部分は調査区外である。確認できる南北方向の長さは0.92m、方形を基調とする形態となるであろう。確認面からの深さは北側で12cm、南側で19cmである。堆積土は1層、人為堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

第29号土壤SK 29 (第18図)

調査区南東部、C-16グリッドで確認した。SK 30と重複し、これを切る。規模は、長軸1.35m、短軸0.98mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは40cmである。堆積土は4層に分けられるが、人為的堆積と思われる。底面は大きく緩やかな起伏が認められる。堅く締まつてはいない。

遺物は、確認面で縄文土器、堆積土3層で鉄製品が出土している。第25図9は、底部近くの



- SK 24・25**
1 黒褐色土 (10 YR 2/1) 壓く締まる、地山粒子微量含む
2 暗褐色土 (10 YR 3/4) 壓く締まる
3 黑褐色土 (10 YR 2/3) 1・2層より繋ぎ層、地山ブロック多量に含む
- SK 27**
1 黒褐色土 (10 YR 2/3) 壓く締まる、地山粒子少量含む
- SK 28**
1 暗褐色土 (10 YR 3/3) 地山粒子～3mm大のブロックを多量に含む
- SK 29**
1 暗褐色土 (10 YR 3/3) 地山・焼土ブロック・灰白粘土少量含む
2 黑褐色土 (10 YR 1.7/1) 地山粒子やや多く含む
3 にい黄褐色土 (10 YR 5/4) 繋ぎ層、地山土と黒褐色土の混合
4 明黄褐色土 (10 YR 6/6) 繋ぎ層、地山土主体
- SK 30**
1 黒色土 (10 YR 2/1) 地山粒子・小ブロック多量に含む
- SK 33**
1 暗褐色土 (10 YR 3/3) 地山粒子・小ブロック・灰白色粘土を多く含む
2 黄褐色土 (10 YR 5/6) 地山粒子・小ブロックを少量含む

第18図 第24号～33号土壤実測図



破片と思われる。外面は撚糸文、内面はミガキ様のナデである。第27図6は、現存長17.7cm、幅1.7cm、図示面下辺に刃部がくる。両端に把手をもつ刀器であろうか。

第30号土壙SK 30 (第18図)

調査区南東部、C-16グリッドで確認した。SK 29と重複し、これに切られる。規模は、長軸0.55m以上、短軸0.64mの楕円形を呈すると見られる。深さは23cmである。遺物は出土していない。

第31号土壙SK 31 (第11図、PL 7)

調査区西侧、C・D-10グリッドで確認した。ST 04張出し部と重複し、これを切っている。規模は、長軸1.72m、短軸0.95mの楕円形を呈する。確認面からの深さは14cmである。堆積土は2層に分層される。底面は緩やかで大きな起伏が見られる。遺物は出土しなかった。

第32号土壙SK 32 (第11図、PL 7)

調査区西侧、D-10グリッドで確認した。ST 04の南東隅と重複し、これを切り、径35cmの柱穴状ピットに切られている。規模は、長軸0.88m、短軸0.8mの略円形を呈する。確認面からの深さは11cmである。

遺物は、土師器小破片2点出土している。第25図10は、先細り状の口縁部が内傾する形態の甕である。内外面最終調整として横ナデが認められる。

第33号土壙SK 33 (第18図)

調査区北西部、C-11グリッドで確認した。規模は長軸0.91m、短軸0.73mの楕円形を呈する。確認面からの深さは28cmである。堆積土は2層に分けられる。底面はやや大きな起伏が見られる。遺物は土師器甕2点である。2点とも厚手で1点は二次火熱を受けている。

第37号土壙SK 37 (第17図)

調査区南東部、C-17グリッドで確認した。SK 15と重複し、これに切られる。規模は、推定長軸0.9m、短軸0.78mの南北に長い楕円形を呈すと思われる。深さは30cmで底面には細かな起伏が認められる。堆積土は2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

第38号土壙SK 38 (第16図)

調査区南西部、F-13グリッドで確認した。SK 08と重複し、これに切られる。規模は、東

西方向の長さが1.1mの円ないしは梢円を呈すると想定できる。確認面からの深さは24cmである。遺物は出土しなかった。

第39号土壙SK 39 (第10図、PL 7)

調査区西側、C-9・10グリッドで確認した。ST 11と重複し、これに切られる。規模は、長軸1.85m、短軸1.35mの隅丸長方形を呈する。確認面からほぼ垂直に掘り込まれ、その深さは42cmである。堆積土は5層に分けられる。主軸方位はN-20°-Eを指し、東側に隣接するST 02と同方向に並ぶ。遺物は出土しなかった。

第40号土壙SK 40 (第14図、PL 15)

調査区北西部、B-10グリッドで確認した。ST 10と重複する位置関係にあるが、その新旧は不明である。規模は、長軸0.8m、短軸0.75mの円形を呈する。深さは20cm、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

第41号土壙SK 41 (第14図)

調査区北西部、B-11グリッドで確認した。ST 08・10を切って構築している。規模は、長軸0.9m、短軸0.76mの梢円形を呈する。深さは34cm、堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

第42号土壙SK 42 (第17図)

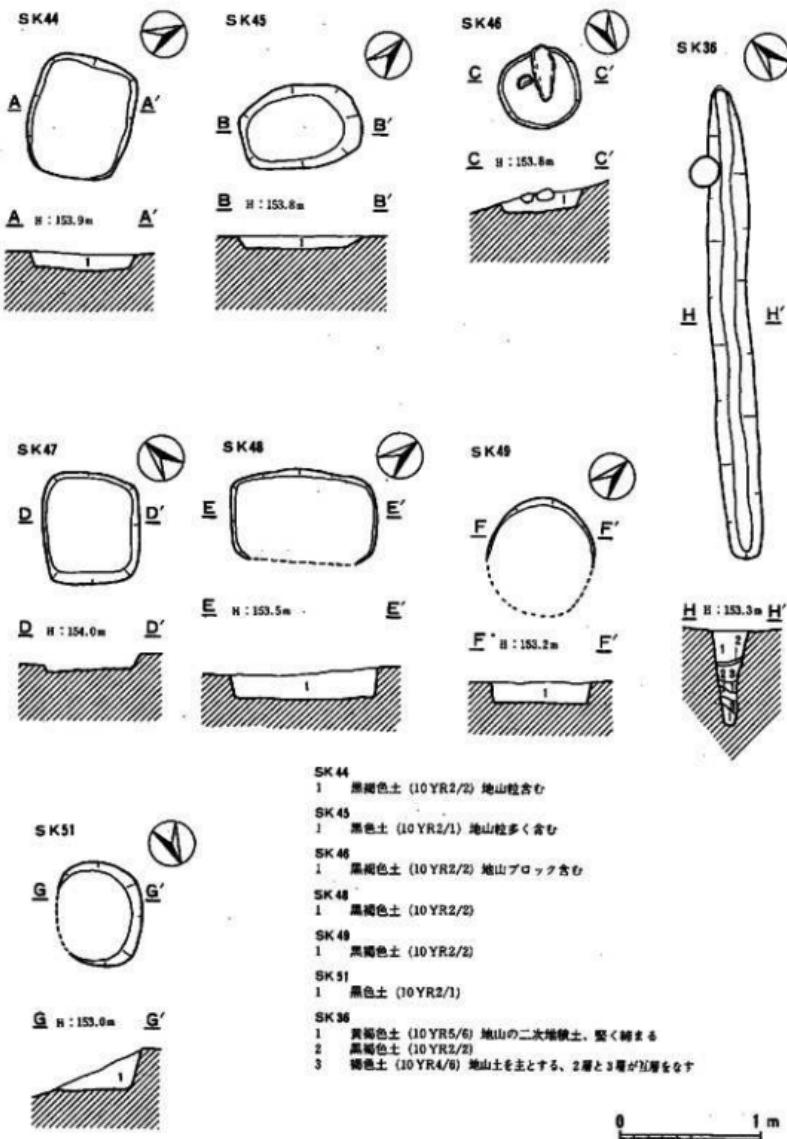
調査区南東隅、C-17グリッドで確認した。SK 43と重複し、これを切っている。規模は長軸1m、短軸0.84mの隅丸長方形を呈する。深さは26cmで、堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

第43号土壙SK 43 (第17図)

調査区南東隅、C-17グリッドで確認した。SK 15・16・42と重複し、それぞれに切られている。規模は重複のため明確ではないが、推定長軸1.2m、短軸0.75mの梢円ないしは隅丸長方形となるものと想定される。深さは24cmである。遺物は出土しなかった。

第44号土壙SK 44 (第19図、PL 15)

調査区南端中央、E-15グリッドで確認した。規模は、長軸0.87m、短軸0.74mの隅丸長方形を呈する。深さは12cm、堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。



第19図 第44号～51号土壤、第36号Tピット実測図

第45号土壙SK 45 (第19図、PL 15)

調査区南端中央、E-15グリッドで確認した。規模は、長軸0.84m、短軸0.58mの楕円形を呈する。深さは10cm、堆積土は1層である。床面は堅く締まってはいない。遺物は出土しなかった。

第46号土壙SK 46 (第19図)

調査区南端中央、D-E-15グリッドで確認した。規模は、長軸0.58m、短軸0.54mの略円形を呈する。深さは14cmである。堆積土は1層、礫が2点含まれている。その他の遺物は認められない。

第47号土壙SK 47 (第19図、PL 16)

調査区南端中央、E-14グリッドで確認した。規模は、長軸0.8m、短軸0.68mの隅丸方形を呈する。深さは12cmである。底面は細かな起伏が見られ、堅く締まっているとは言えない。遺物は出土しなかった。

第48号土壙SK 48 (第19図)

調査区南端中央、D-15・16グリッドで確認した。南東側の壁は確認できなかったが、規模は、長軸1.02m、短軸0.66mの隅丸長方形を呈すると想定できる。深さは20cm、堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

第49号土壙SK 49 (第19図)

調査区南端中央、D-16グリッドで確認した。南東側の壁は確認できなかったが、径0.76m程の円形を呈すると思われる。深さは15cm、堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

第50号土壙SK 50 (第16図、PL 12)

調査区南西部、F-12グリッドで確認した。SK 13と重複し、これに切られる。規模は、東西方向の長さ0.73mの円ないしは楕円形を呈するであろう。堆積土は1層、深さは12cmである。遺物は出土しなかった。

第51号土壙SK 51 (第19図)

調査区南端中央、E-15グリッドで確認した。規模は、長軸0.74m、短軸推定0.6mの楕円形を呈する。深さは西側壁直下で30cmである。堆積土は黒色土1層である。遺物は出土しなか

った。

(4) Tピット

第36号TピットSK 36 (第19図)

調査区南東部、C-15・16グリッドで確認した。形態は溝状を呈し、確認面での長軸3.32m、短軸0.28m、底面での短軸は僅か0.1mである。深さは68cmで、北東端部はオーバーハングしている。堆積土は3層に分けられた。主軸方位はN-43°-Eで、北東-南西方向の段丘崖線とほぼ平行している。遺物は、確認面で人頭大の疊2点のみの出土である。

(5) 柱穴状ピット (第20図)

郭上面では、第20図に示したように450本以上の柱穴状のピット(深さ20cm以上を対象)が認められる。ピットの分布は、郭上面全域に広がっているようであるが、調査区北西端部と南東端部で疎らな箇所が見られる。これらピットは、掘立柱建物跡あるいは竪穴造構の柱穴を構成すると考えられるが、現地及び整理段階での検討によっても、明確に建物跡等になるものは確認できなかった。ただし、SI 07北西部のB-12グリッド内、調査区中央南寄りのD-12・13グリッド内、調査区中央東寄りのD-14グリッド内の3カ所でL字状に柱穴が並びそうであり、図示しておく。なお、第20図中の○印は深さが20~29cm、●印は30cm以上であることを示している。

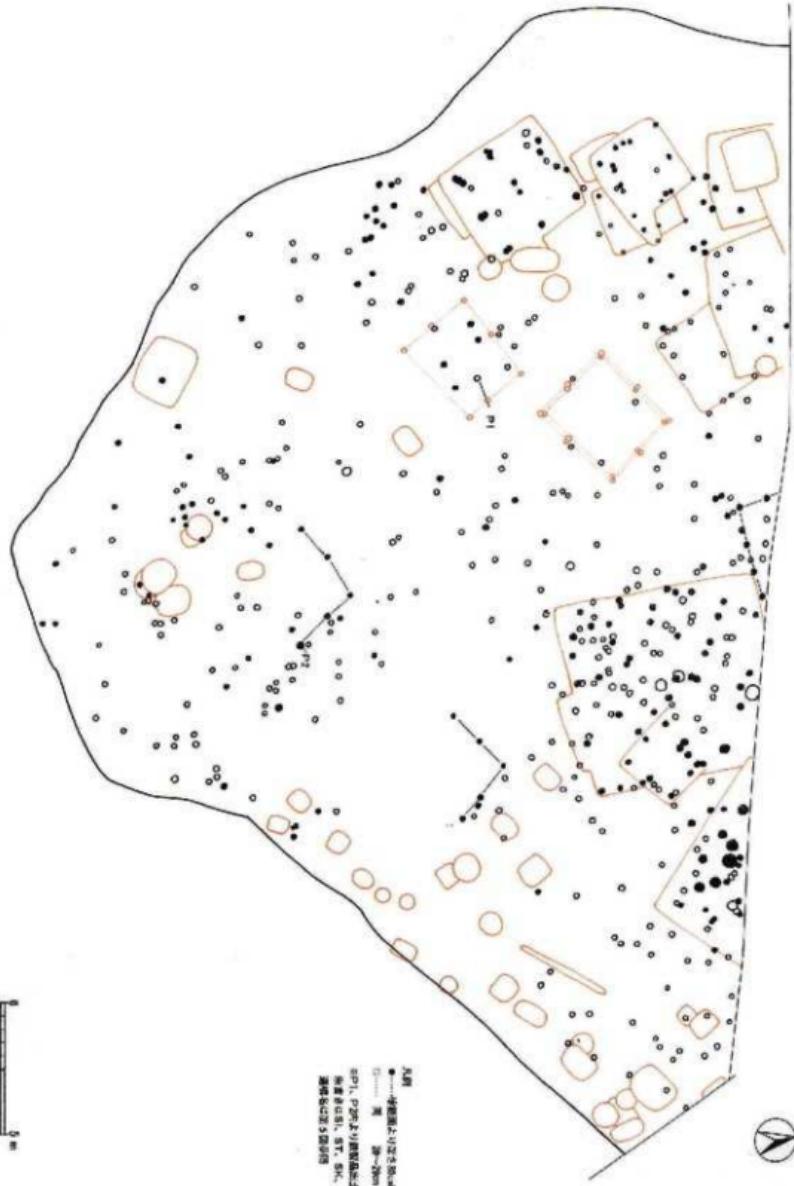
数多くの柱穴状ピットの内、遺物が出土したのは次の2本のみであった。1つはD-11グリッドピット1から鉄製品2点、鉄滓1点が出土した。位置的にはST 05内に当たり、同窓穴を構成する柱穴であった可能性もある。第27図7は厚さ1mm前後の薄い板状、8は7よりやや厚い板状の製品である。

もう1本は、D-13グリッドでL字状配置を示すピット2出土の鉄製品である。9は厚さ2mm前後の板状を示し、緩く湾曲している。

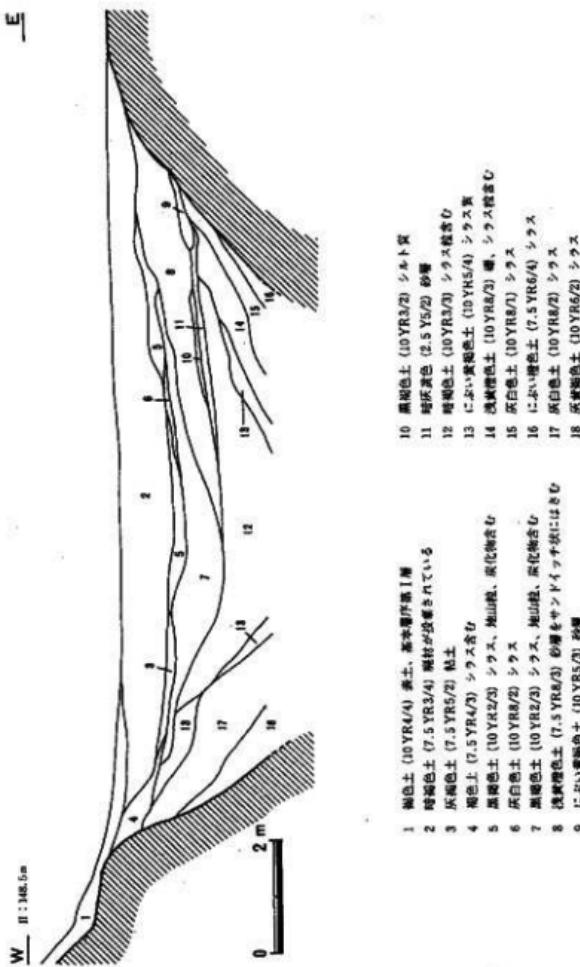
3. 郭斜面調査区の遺構と遺物

郭東西の斜面調査区には、道路計画路線にほぼ平行するように3つのトレンチを設定し、調査を行った。すなわち、郭東側にAトレンチを、郭西側にB・Cトレンチを設定し、遺構の広がりを確認するためにその一部を拡張し、結果として不定形の調査区を示している。

調査の結果、Aトレンチでは第1号空堀(SD 01)、犬走り遺構、Bトレンチで第2号空堀(SD 02)、土壘、第3号溝状遺構(SD 03)を確認した。



E



第21図 第1号人工堤土層断面実測図

(1) 空堀・土壘

第1号空堀SD 01 (第5図・21図、PL 17)

調査区（郭）東側に設定したAトレンチにおいて確認した。本空堀上面には廃材を含んだ暗褐色土が堆積しており、本層を取りのぞくことにより空堀の一部が表出する。本空堀は、館跡第Ⅰ郭と第Ⅱ郭を分離するものであったが数度にわたって行われたⅡ郭の削平や土砂採取によって空堀の東側立ち上がりが現地表面まで消失している。現状での各郭間の距離は約20m、郭上面から空堀確認面まで比高7mを測る。幅2mのサブトレンチを設定し、空堀の立ち上がり、堆積土の状況を確認した。立ち上がりは底面より平均で50度と急激で、深さは推定で5~7m（郭上面より12~14m）を測るものと考えられる。空堀東側斜面に幅0.3m、長さ3.5m~4m深さ0.2mの溝状遺構を確認した。堆積土は確認できただけで16層に分層され斜面の崩壊土であるシラスの堆積が多く見られた。

堀内出土遺物は、陶磁器、土師器、須恵器、縄文土器、青銅製品がある。第25図11は、第Ⅰ層出土の染付唐草文の大皿である。江戸後半（18世紀）の伊万里産である。12は、第Ⅲ層出土の染付の碗である。江戸後半の時期と考えられるが、产地特定はできない。ただ伊万里のものとは胎土が異なるようである。13は、小片であるが青磁碗である。江戸後半の日本産である。

土師器には小石状の砂粒を多く含む甕などが見られるが、全体に焼成は良好である。須恵器は全て大甕の破片であり、第28図1・3・4は胎土分析を行い、1は、五所川原群産であるという結果を得ている。第25図14は、Ⅲ層（E-18グリッド）出土の縄文土器である。地文（LR）に幅広で深い沈線を引いている。

第27図10は、第Ⅲ層出土の鉢状を示す青銅製品である。図示面両端を欠き、その長さ14.5cm、幅1.3cmである。緩く湾曲する鉢状部の凹面には孔をもつ鉤がつく。重さ28gである。

第2号空堀SD 02・第1号土壘 (第5図・22図、PL 18)

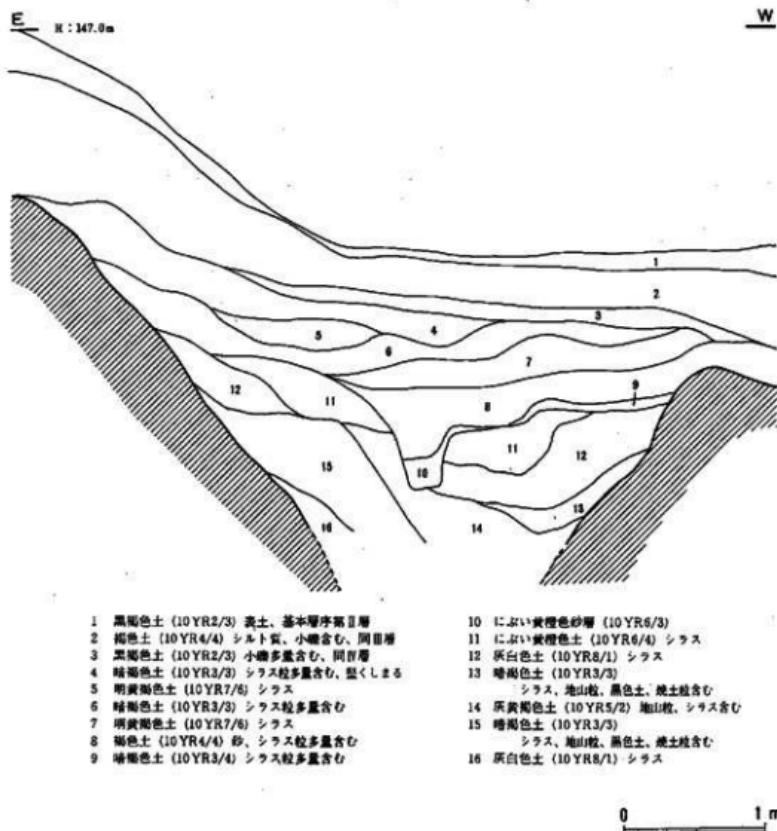
調査区西側に設定したB・Cトレンチにおいて確認した。

空堀は郭上面と土壘を分離するように構築され、土壘上面での上幅3.8m、深さ（推定）2~2.5mを測る。郭上面と空堀底面との比高差は14mを測る。堆積土は確認できただけで13層に分層され、斜面の崩壊土や上面からの投棄と考えられる焼土粒・炭化物を含んだ暗褐色土の堆積が見られた。また、砂粒（10層）の堆積、非常に堅く結まった4層の状況から3期に区分することができよう。

土壘は地山層を掘り残して構築され、土壘上面より約30度の角度で下位水田へと傾斜する。空堀底面より高さ約2m~2.5mを測る。土壘は一部が開口し第3号溝状遺構と続く。

堀内出土遺物は、土師器、須恵器、砥石がある。第25図15は、Cトレンチの地表面から85cm

下の黒褐色土層（第3層）から出土の把手付土器の把手部分である。把手の取り付け方法は、身の部分に穴をあけ、中空の把手を差し込んで回りに粘土を張り付けた後、把手を含めた全面を粗いケズリで仕上げている。胎土は比較的精選されているように見え、焼成も極めて良好である。二次的な火熱を受けている。把手突出部分の長さは約5cm、略円形を示す縦断面はその径約3.5cmである。第26図6は、小形棒状の磁石である。4面を磁面としている。図示面下端は一方の基部近くと思われるが欠損のため長さ不明。石質は泥質凝灰岩、重量は24gである。



第22図 第2号空堀 (Cトレーナー) 土層断面実測図

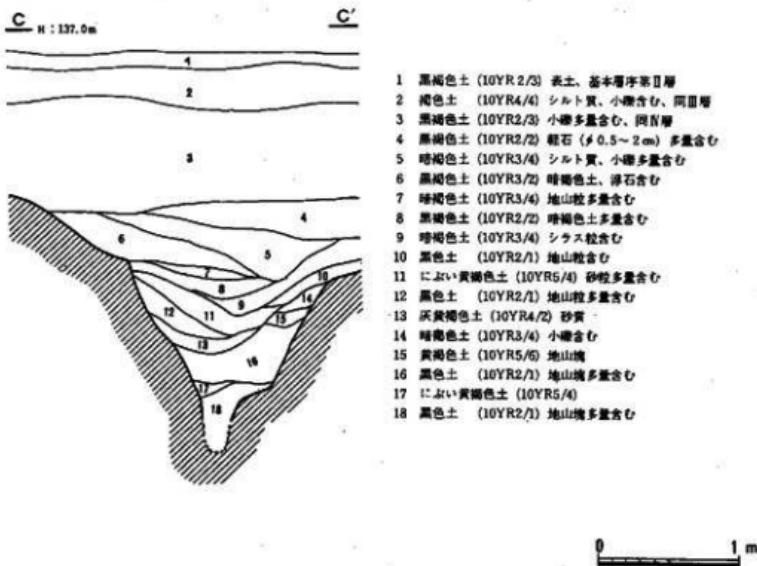
(2) 溝状遺構

第3号溝状遺構SD 03 (第5図・23図、PL 18)

土壘開口部より続く溝状遺構は、斜面と同角度をもち下位水田へと流れ落ちる。長さ約25m、上幅1.4m、深さ約1mを測る。横断面形は逆台形を呈するが水流により底面が抉り取られ凸状となり、砂粒の堆積が見られた。水田面のレベルに近付くにつれて湧水が激しい。

(3) 犬走り遺構 (第5図、PL 17)

郭東側斜面、現地表面よりわずかに高い地点（館構築当時は斜面中程か）に構築されている。第Ⅰ郭をつぶさに観察すると郭の北端部からAトレントを横断し郭南端部まで続いている。平坦部は幅1～1.5mを測り、郭上面とは比高差6mを測る。犬走り遺構上面と郭西側にある土壘上面の標高はほぼ同一であり構築当時は連続していた可能性もある。



第23図 第3号溝状遺構土層断面実測図

4. 遺構外出土遺物

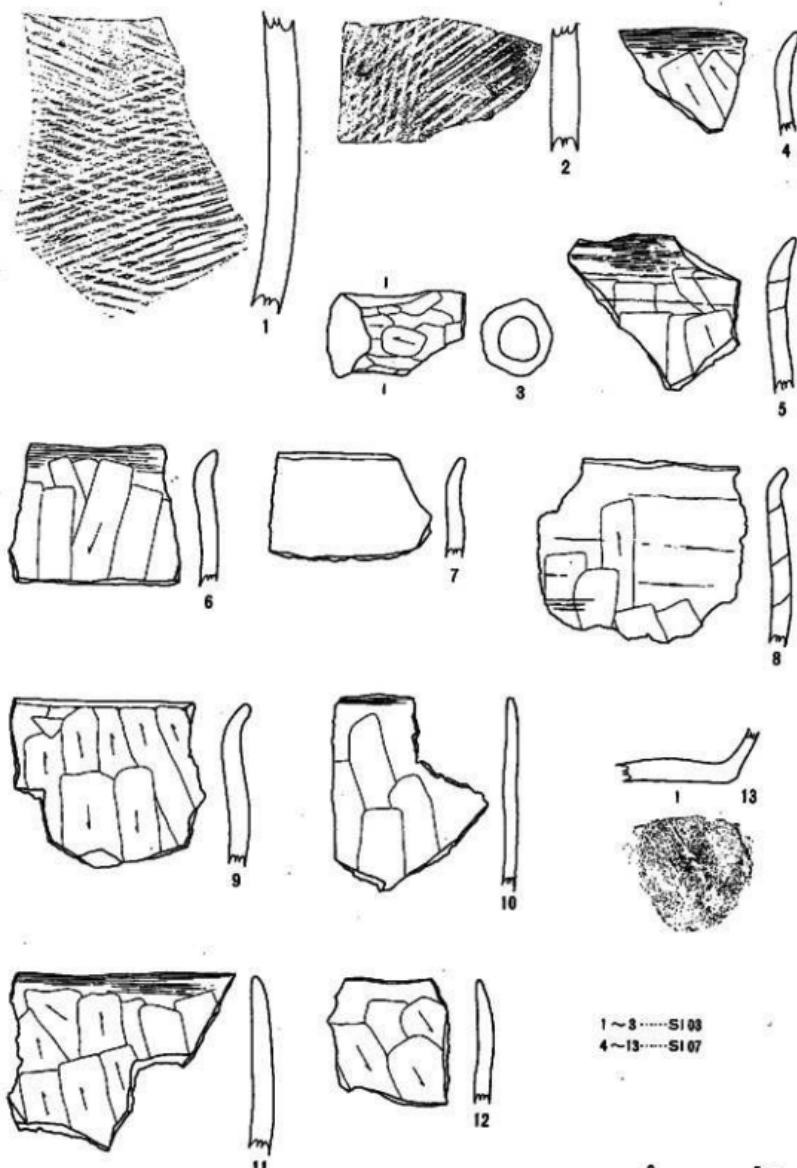
(1) 土 器

第25図16～18に示した縄文土器が出土している。16はBトレンチ(D-5グリッド)表土出土である。くびれをもつ深鉢形土器の胴部中半部の破片と思われる。地文(R.L.)の上に2本1組みの浅い横位の沈線を上下に配した中に波状の沈線を描いている。器形、文様構成から後期後半と想定される。17・18はBトレンチ西端(D-4グリッド)表土出土である。17は地文に2本の平行沈線を描出している。胎土、焼成から、18とは個体は別であるが同時期と見られる。

(2) 石 器

第26図7は、Bトレンチ(C-7グリッド)第4層出土の砥石である。図示面の上端を欠く。泥質凝灰岩を素材とし、重量は174gである。

(高橋 学)

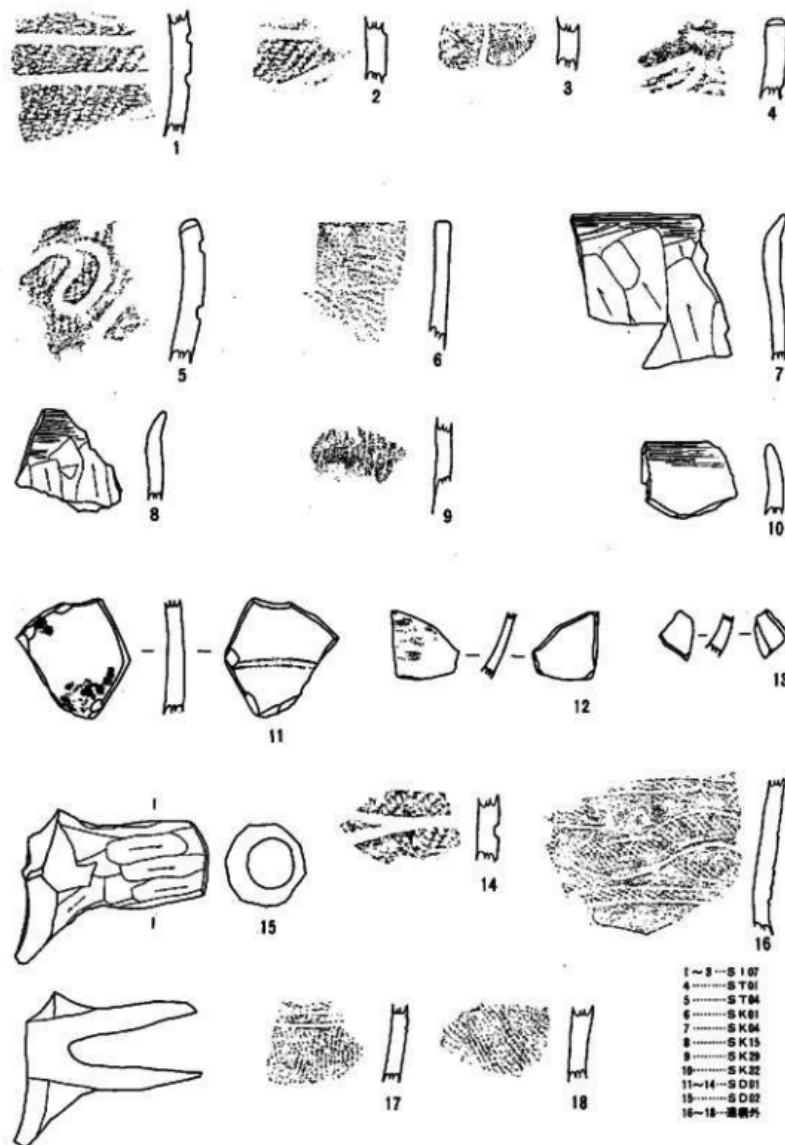


第24図 出土遺物実測図(1)

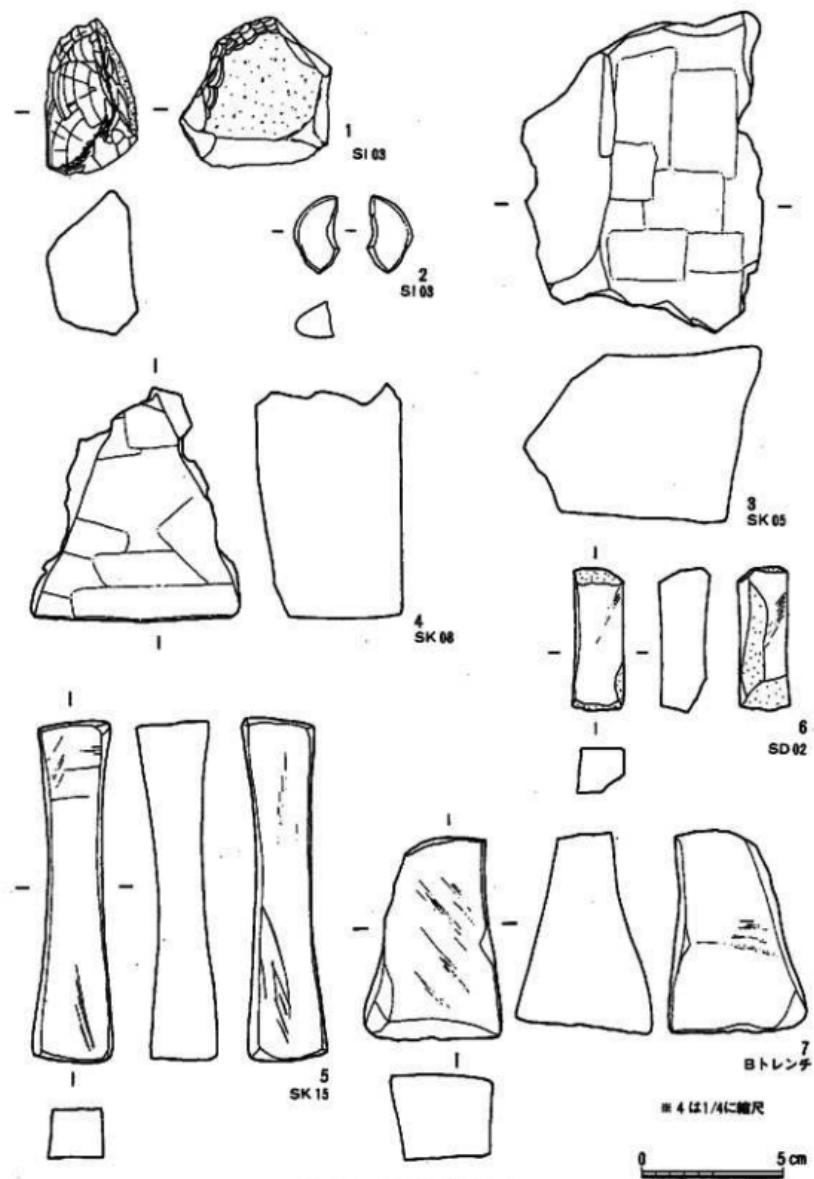
- 45 -

0 5 cm

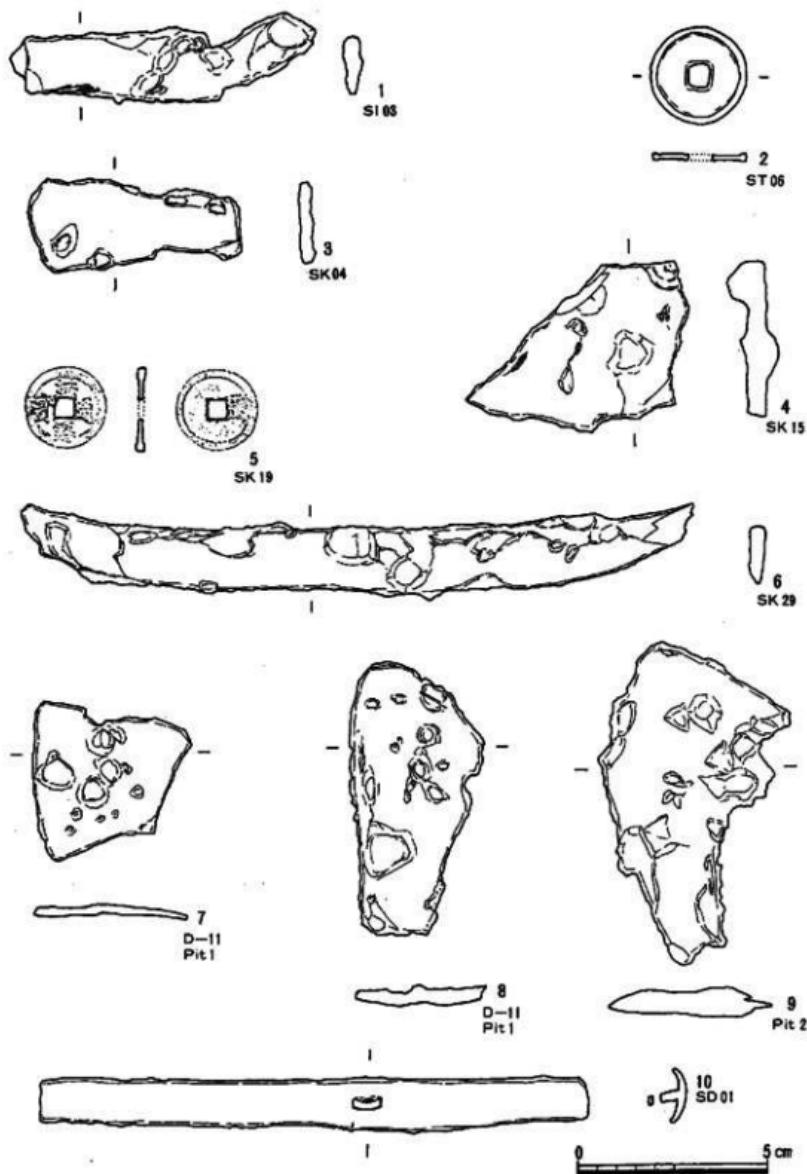
1~3---SI03
4~13---SI07



第25図 出土遺物実測図(2)



第26図 出土遺物実測図(3)



第27図 出土遺物実測図(4)

第Ⅳ章 自然科学的調査

地図野跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻利一

1 はじめに

五所川原窯群が操業を始めると、五所川原群産の須恵器は青森県全域のみならず、秋田、岩手県北部地域、さらに、北海道全域の遺跡にまで供給されていたことが、この数年の研究でわかつて来た。しかし、北海道には五所川原群産以外の須恵器も数多く出土している。非五所川原産の須恵器は青森県内の遺跡からも出土し、五所川原市内の遺跡からすら出土する。その产地は未だ特定されていない。東北地方から北陸地方にかけての日本海沿岸地域の製品と考えられている。この非五所川原群産の須恵器は秋田県内の遺跡からも出土するものと思われる。このようなデータを集積しつつ、東北地方北部地域の、9、10世紀代の須恵器の伝播、流通が古代史に結び付けられて解釈される日が来るものと思われる。

本報告では地図野跡出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2 分析結果

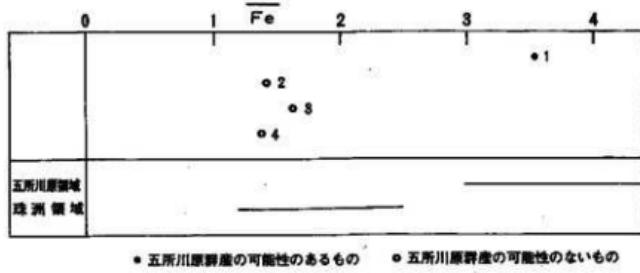
土器胎土は100メッシュ以下の粒度に粉碎されてから、コイン状の錠剤に固められて、波長分散型の全自動式蛍光X線分析装置で分析された。定量分析には標準試料として、岩石標準試料JG-1を使用した。各元素の蛍光X線強度は対応する元素のJG-1の蛍光X線強度で標準化された。したがって、分析値はJG-1による標準化値で表示された。

今回分析した4点の土器の分析値を表2に示す。はじめに、4点の須恵器の中に五所川原群産の製品があるかどうかを調べてみた。そのために、五所川原群の須恵器に特異的な因子であるFe因子を使って、五所川原群産の可能性がある須恵器を抽出してみた。第28図にFe因子を比較してある。No1は五所川原領域に分布し、五所川原窯群の製品である可能性があるが、No2、3、4の3点は五所川原群産の可能性はないことを示している。

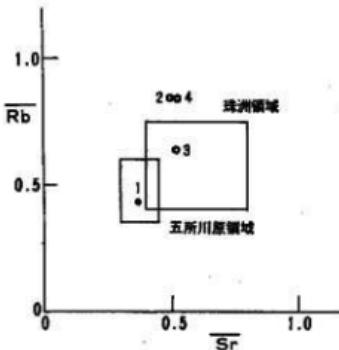
第29図にはRb-Sr分布図を示す。No1はこの分布図でも五所川原領域に分布するが、他の3点は分布しない。第30図にはK-Ca分布図を示す。No1はこの分布図でも五所川原領域に分布した。

この結果、No1は全因子で五所川原領域に対応し、五所川原群産の須恵器と推定された。逆に、No2、3、4の3点の須恵器は全因子で対応せず、五所川原群産ではないと推定された。第29図のRb-Sr分布図での分布位置からみて、秋田県内産というよりも、北陸地方に产地を求める方がよさそうである。同じような胎土をもつ須恵器は総合運動公園関連遺跡にも出土し

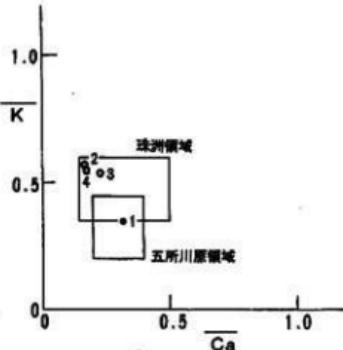
ているので、今回分析した、両遺跡の須恵器を一括してクラスター分析にかけてみた。得られた樹状図を第31図に示す。左側に縦列に並んだ数字はコンピューターへの入力番号である。No 1～5は総合運動公園関連遺跡出土須恵器でありNo 6～9が地羅野館遺跡の須恵器である。横軸はK、Ca、Rb、Sr、Naの5因子を使い、最短距離法で計算した類似度を示す。類似しているものから順に1本の枝に結び付けられていくが、No 1とNo 2、No 3とNo 6はそれぞれ類似しており、これら4点はさらに大きな枝へと結び付けられていく。No 6は地羅野館遺跡のNo 1の須恵器であり、総合運動公園関連遺跡のNo 1、2、3の須恵器とともに、全因子で五所川原群産と推定されているものである。他方、No 7、9（地羅野館遺跡のNo 2、4）は類似していることは第29、30図からもよく理解できる。これはさらに、No 8（地羅野館遺跡のNo 3）に結びつき、さらに、No 5（総合運動公園関連遺跡のNo 5）と結びつく。これらは4点、類似した化学特性をもっていると判断できる。もし、これらが中世陶器であれば、珠洲陶器である可能性がある。またもし、須恵器であれば、北陸地域からの搬入品である可能性がでてくる。



第28図 Fe因子の比較

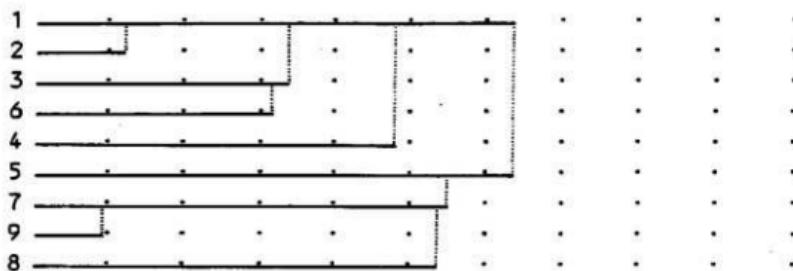


第29図 Rb-Sr分布図



第30図 K-Ca分布図

1メモリ= .05 *** クラスター ファンセキ ***



No.1~5 総合運動公園開発遺跡出土品
No.6~9 地図野館跡出土品

第31図 クラスター分析 (K,Ca,Rb,Na因子使用)

第2表 分析 値

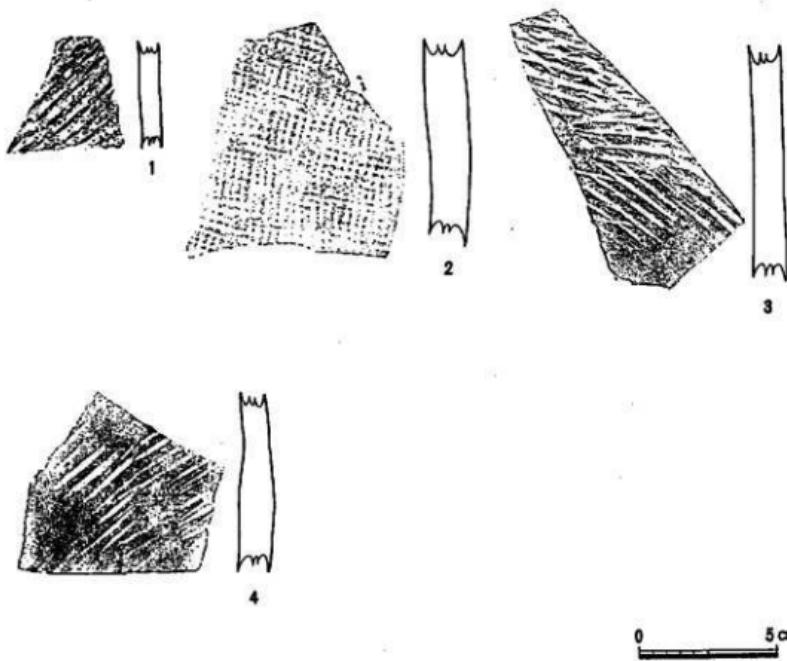
* 資料名は本文中の番号と対応

図版番号	資料名	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
第32図1	No 1	0.345	0.323	3.54	0.434	0.373	0.223
2 PL 22-1	No 2	0.556	0.169	1.42	0.835	0.503	0.292
3 2	No 3	0.536	0.232	1.64	0.636	0.619	0.365
4 3	No 4	0.553	0.170	1.39	0.835	0.521	0.298

第3表 塩光X線分析試料一覧

* 資料名は本文中の番号と対応

図版番号	資料名	出 土 地 点	備 考
第32図1	No 1	地図野館跡 E-18グリッド空堀、Ⅲ層	SD 01
2	No 2	◆ 第3号竪穴住居跡	平安時代
3	No 3	◆ C-17グリッド、トレンチ内	SD 01、珠洲系?
4	No 4	◆ D-19グリッド、Ⅱ層下位	SD 01



第32図 蛍光X線分析試料

第V章 まとめ

地羅野館跡の発掘調査により明らかとなったことは次のとおりである。

検出した遺構は、縄文時代のTピット1基、平安時代の竪穴住居跡2軒、中世の竪穴造構11基、平安時代～中世の土壙44基、柱穴状ピット多数、及び空堀2条、土塁、溝状造構、犬走り造構各1条である。これら造構内出土の遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器、土製品（埠）、石製品（延石）、金属製品（鉄・青銅製）、古錢、陶磁器など多岐にわたるが量的には、ダンボール箱1/2程度である。本章では以下に掲げる項目についてまとめ、地羅野館跡の調査を終了することにしたい。

1. 竪穴住居跡

2軒検出された竪穴住居跡は、出土遺物すなわち土師器甕、把手付土器、須恵器甕の器種構成、器面調整から11世紀代の構築と考えられる。

またSI07で確認された住居内に出入口状の施設を有する該期の遺構は、本遺跡の北約1.5kmに所在する高市向館跡で2例報告されている。このうち第12号竪穴住居跡は、南側の壁の西寄りにカマド、東寄りに出入口施設をもつ点で、地羅野館例と共に通する。高市向館跡の「階段状の施設」について、その報告では構築方法にふれていないが、写真で判断する限りでは、おそらく地山土等を二次的に利用して盛り、緩いスロープ状の施設を作り出しているようである。

米代川流域では該期の住居に出入口状の施設をもつ例が幾つか報告されている。小坂町はりま館遺跡のまとめでは、その形態から2分（I・II類）している。住居外に張出しをもつタイプをI類、張出しを持たず壁溝の途切れ部分から想定できるタイプをII類とし、I類は、はりま館、比内町袖ノ沢、八森町土井、II類は、はりま館、能代市上の山田、腹穂の沢A地区に検出例があることを記している。これら一連の住居跡は、報告書等によると10世紀中葉～11世紀代の構築のようである。この年代観は、地羅野館跡の土器から見た年代と合致する。

一方、同様の施設は青森県の鰐ヶ沢町立沢、碇ヶ関村古館、岩崎村大野平などでも検出され、出土遺物から10世紀後半～11世紀初頭に実年代を想定している。秋田県、青森県での事例を総合すると、この種の竪穴住居跡は、構築方法に差異はあるものの、10世紀後半～11世紀代における北東北（米代川流域以北）の竪穴住居形態の一類型として覚えることができよう。

2. 竪穴造構

本館跡で竪穴造構としたものは11基を数える。これらの遺構は、ST06床面で中世と見られる古錢（銭名不明）1点が出土しているのみで、時期は決し得ない。ただ周辺遺跡での形態類

例から、大きく中世に構築された何らかの施設であることは間違いないであろう。

地羅野館跡の竪穴遺構は、次に述べるように形態的にはバラエティーがある。しかし配置とその方向性はまとまりがある。すなわち、ST06を除くと調査区北西部に集中し、重複は見られるものの、主軸方位は概ね北東—南西を指している。このことは竪穴構築に際して規制が働いていたことを想起させるものがあり、規制が行き届いていた時間内での構築→廃棄が繰り返されていたとするならば、漠然とした言い方ではあるが、長時間（数世代以上か）の時間幅は考えづらいのではないだろうか。

竪穴遺構の形態は、それぞれの視点に立ってみると実にバラエティーに富む。柱穴配置では、四隅に4本（ST03）、四隅とその中间に各1本で計8本（ST04・07A・07B）、先の8本柱のうち中间の柱1本を欠く7本（ST02・11）、四隅と中间の柱は長軸壁に各2本、短軸壁に各1本の計10本（ST08、ST06？）。柱穴の形態は、方形である例（ST06・11）と円形の例（残りのST）。周壁と柱穴の位置では、壁直下に柱穴が掘られているもの（ST02・06・08・10）、壁と柱穴がやや離れているもの（ST03・04・11）。さらに床面上の焼土の有無、張り出し状施設の有無、壁溝の有無などが挙げられる。

竪穴遺構あるいは竪穴建物跡と称される遺構は、大館市片山館コ、比内町真館、谷地中館、鹿角市小枝指館、小平、新斗米館、高市向館、御休堂、歌内、小豆沢館、妻の神Ⅲ、乳牛平、一本杉、二ツ井町竜毛沢館跡などで検出例がある。竜毛沢館跡では遺構内出土遺物と炭化材の放射性炭素年代測定により、14世紀代の構築を見ていている。これら遺構の用途については、住居、倉庫、家畜小屋など諸説があり定かではない。しかし妻の神Ⅲ、乳牛平での屋外カマドと想定している焼土遺構の存在と併せて、竪穴遺構は、屋外に炊事施設をもつ居住施設の可能性も考えられる。

3. 土 壤

44基の土壤は、その規模、平面形態から幾つかのグループに類別できる。

A類：長軸がおよそ1.8m以上の隅丸長方形を示す大形の土壤—SK06・10・39

B類：径1m前後の円形を呈し、垂直に掘り込まれている土壤—SK04・13など

C類：一辺1m前後の方形を呈し、垂直に掘り込まれている土壤—SK01・03・19・25など

D類：長軸がおよそ1m～1.3mの橢円形を示す土壤—SK08・09・24・33など

E類：長軸がおよそ1.3m～1.7mの隅丸長方形を示す土壤—SK15・29

F類：長軸が1.2m台で、長軸に対する短軸の比が小さい土壤—SK16・20

類別した土壤の構築時期は、底面から遺物の出土ではなく、その点で明らかにできない。僅かに底面直上で土師器破片が得られているSK03は平安時代、堆積土中位で古銭の出土している

SK19は中世と想定できそうである。また堆積土中～上位で土師器の出土しているSK15・22・32・33は平安時代の可能性はあるが断定はできない。少なくとも類別した土壤がそのまま時期差を表すものではないことをC類のSK03とSK19が教えてくれる。

A類は、規模、配置などから後述の竪穴造構あるいは竪穴造構とつながりの深い造構と想定できる。一方、B～F類は例外はあるであろうが、形態、堆積土の状況（人為堆積が多い）などから土壤墓として認知できるであろう。特にB類SK04は、人骨等の直接的に墓である証拠は得られなかったものの、8層に認められる灰あるいは海綿状の物質、5層中の礫、貼蓋状の2層などは墓としての有力な状況証拠として採用してよいであろう。この中で特に注目すべき点は、5層中で2ヶ所にまとまりを見せる板状の礫の存在である。北海道ウサクマイ遺跡の土壤墓（7世紀代）では、計28基の墓壙中、10基の被葬者の頭付近に扁平な礫が認められた。同報告では礫のもつ意味を「死者の頭や顔を惡靈から守るために」との解釈が妥当ではないかと記している。地図野館跡SK04も同じ意味で礫が置かれたとするならば、墓制の上で北海道との関連が伺え、かつ頭位は南東部と想定できる。

次いで、これら土壤を配置の上から見てみよう。とりあえずその所属時期を不問として一覧すると、例外はあるものの列状の配置を示すという特徴は導き出せそうである。基本的には、調査区南縁で段丘崖線に沿うように北東～南西方向に並ぶ。さらにこのラインを起点として、これに直交し北西に延びる列も認められる。すなわち、直交方向の土壤列は、北東側からSK42を起点にSK43→37→15→12、SK26を起点にSK25→24→22→3、SK38を起点にSK8→50→13→5の3列が見られる。

土壤墓が列状の配置を示す例は多く、県内でも能代市寒川Ⅱ（4世紀代か）、横手市田久保下（6世紀代）や、葬法は異なるが秋田市湯ノ沢F（10世紀代）でも墓が列をなして検出されている。いわゆる「墓道」等との係りで今後とも検討を続けなければならない課題の一つである。

4. 土壘・空堀・犬走り造構

今回の調査で2条の空堀、1条の溝状造構、土壘、犬走り造構を確認した。

空堀は、いずれも郭上面から急な角度で掘り下げられ、しかも西側中段において確認された空堀は並行して延びた土壘と共に郭を取り巻き強固な防衛施設を作りだし、軍事施設的な要素が強い。

溝状造構は、西側で確認された土壘を切り開き、西側水田へと流れ落ちていく。所謂「たてぱり」に近い性格をもつものと考えられる。このような施設が市内所在の館跡に一般的に見られるものなのか、また、特異なものなのか、資料の増加を待つところが大きい。

犬走り造構は、郭東側斜面より比高差7mをもって確認された。幅は1～1.5m程を測り、

遺構北端と南端部とでは比高2m程を測る。仮に、遺構が南端を回り西側へと延長した場合、中段平場とほぼ同一レベルとなり、これらは本来繋がっていた可能性が強い。

5. 遺 物

地図野館跡で出土した遺物は、縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器、須恵器、土製品（壇）、石製品（砥石）、平安時代～中世の金属製品（鉄・青銅製）、中世の古錢（洪武通宝）、近世の陶磁器がある。この中で特徴的なのは、中世の土器、陶器が全く見られないことである。館が機能していたと想定される時期の遺物で明確なのは古錢と金属製品の一部だけである。このことは何を意味するのであろうか。焼物の器は使用せず、木器か鐵器のみを使用していたのか、土器を捨てる場所が調査区外にあるためか、あるいは次なる地へ移動する際に土器類も一緒に運んだか、いずれにしても問題は残る。

これに対して平安時代の土師器、須恵器は、量は少ないものの、この時期、この地域の器種構成を見事に追録してくれた。それは土師器壇、把手付土器、須恵器大甕、鐵製品（鐵滓を含む）などである。土師器における壇の欠落と中世陶器が含まれないこと、土師器壇における「ナタケズリ」状の粗いケズリの採用などから、11世紀代を主とする時期と見てよいであろう。

また2点出土した把手付土器は、県内では小坂町はりま館、鹿角市高市向館、太田谷地館、妻の神I、下沢田、赤坂B、比内町谷地中館、大館市上野で出土例がある。この土器は、青森県内の出土例と併せて、おおよそ10世紀後半～11世紀代の分布範囲と時期が限定された遺物である。なお上野では竪穴住居跡内より11世紀代の擦文土器と共に伴っている。把手付土器は、大野恵司氏の言を借りれば、「この土器の多くが、製鉄に関連する遺構を持つ遺跡あるいはそのような遺構の近くから出土することから、製鉄に関係を持つ土器とすることもあながち否定出来ないが、鉄滓や溶解物の付着した例はこれまでのところ見ていない」。本遺跡でも鐵製品、鐵滓は出土しているが、鉄生産と係りある遺構は認められなかった。しかし逆に鉄生産に係りない集落であるとすれば、何を生業としていたのであろうか。

以上、平安時代の遺構・遺物については、11世紀代における米代川上流域集落の特質の一端、すなわちその立地、出入口施設を持つ竪穴住居跡、把手付土器の存在を引き出すことができた。

一方で、いわゆる館期の様相は判然としない。郭の周囲を巡る土塁・空堀等は、館を構成する施設であったことに間違はないであろう。また郭上面も何らかの施設物を構築するために整地を行っていることも空堀内の堆積土から明らかである。しかし、肝心の遺構がはっきりしないのである。もちろん竪穴遺構は館期と重複する時期であろうし、土塼墓の多くはこの時

期であろう。やはり調査区が郭の半分程であること、遺構の時期を特定できる中世の遺物が見られないことが、この館期の様相を不透明にしている。

文献にその名を出さない館が発掘調査において、その姿の一部を現した。数々の問題点を整理し、多角的視野で「館」を検討していかなければならない。

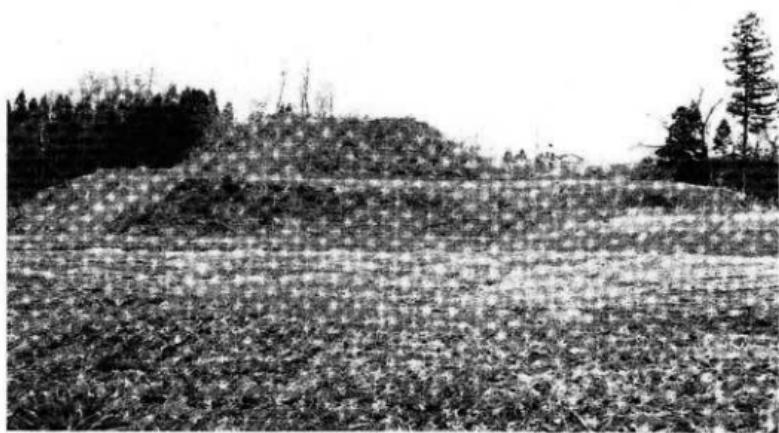
(高橋 学)

引用・参考文献

- 大野憲司 「太田谷地館跡について—空堀を持つ平安時代後葉の集落跡—」
『よねしろ考古』第5号 1990年
- 秋田県 「秋田県総合地質図幅 花輪」1973年
- 秋田県教育委員会 「乳牛平遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ」1984年
- 秋田県教育委員会 「妻の神Ⅲ遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ」1984年
- 秋田県教育委員会 「はりま館跡発掘調査報告書」1990年
- 秋田県教育委員会 「上野遺跡」「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財
発掘調査報告書Ⅵ」1992年
- 青森県教育委員会 「塩沢遺跡」1990年
- 秋田県教育委員会 「寒川Ⅱ遺跡」「一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」1988年
- 秋田県教育委員会 「田久保下遺跡」「秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書」1992年
- ウサクマイ遺跡研究会 「鳥櫛舞」1975年
- 秋田県教育委員会 「竜毛沢館跡発掘調査報告書」1990年
- 鹿角市教育委員会 「地羅野館」「鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書（5）」
鹿角市文化財調査資料30 1986年



PL 1 地羅野館跡



館跡近景（南より）



館跡近景（東より）

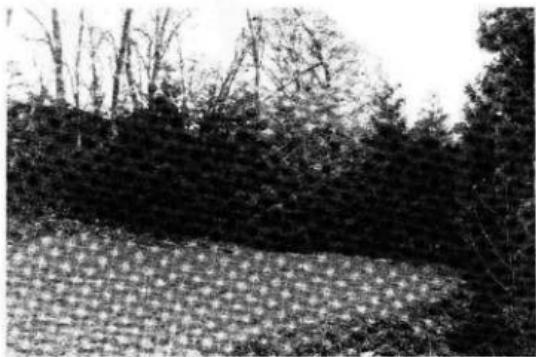
PL 2 地羅野館跡近景(1)



館跡近景（南上り）



館跡全景



第Ⅰ郭北西側の腰郭

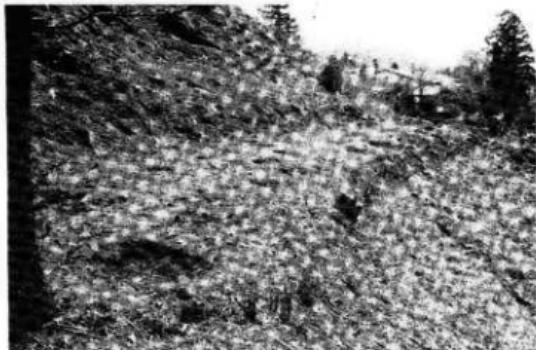


第Ⅰ郭北側の空堀

館跡近景



P L 4 第Ⅰ郭北側空堀・地羅野館跡近景



第Ⅰ郭中段平場



第Ⅰ郭北西側の腰郭



調査風景

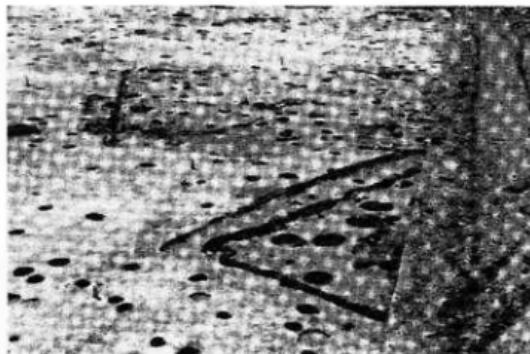
P L 5 第Ⅰ郭西側中段・調査風景



SI 03

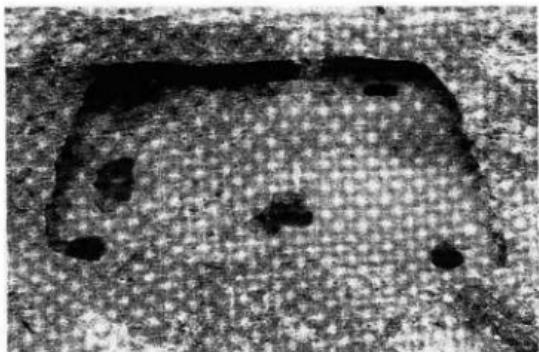


SI 07 · ST 06

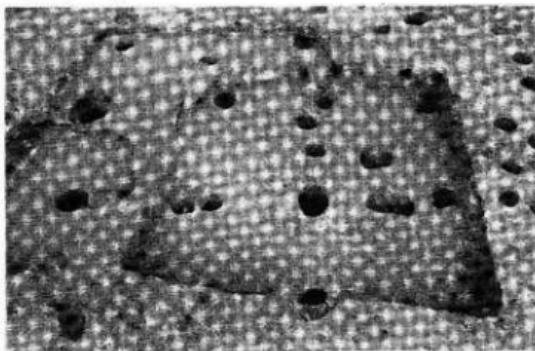


SI 03 · 07

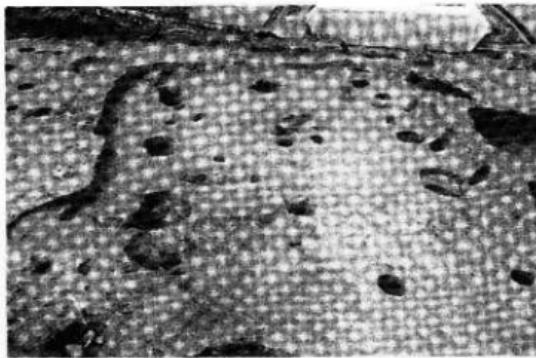
P L 6 第3号・7号竪穴住居跡



ST 02

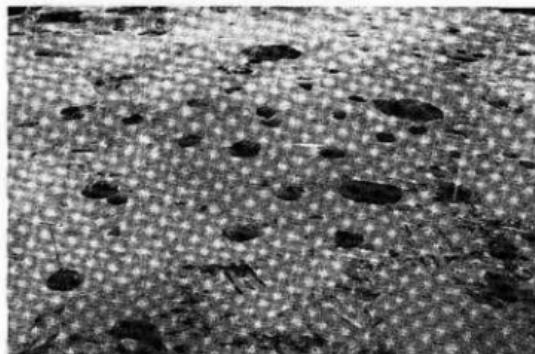


ST 02・11
SK 39

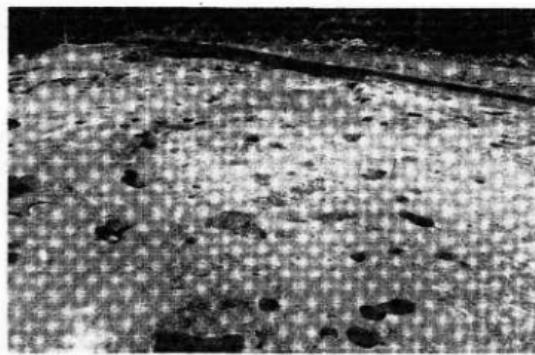


ST 03・04
SK 31・32

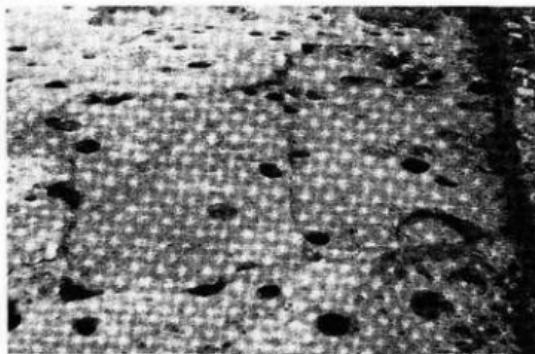
P L 7 第 2 号・3 号・4 号・11号 穴道構



ST 05

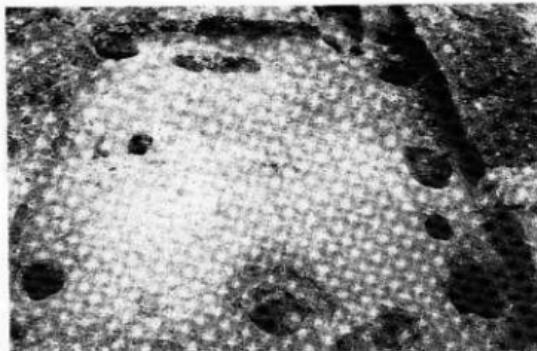


ST 07

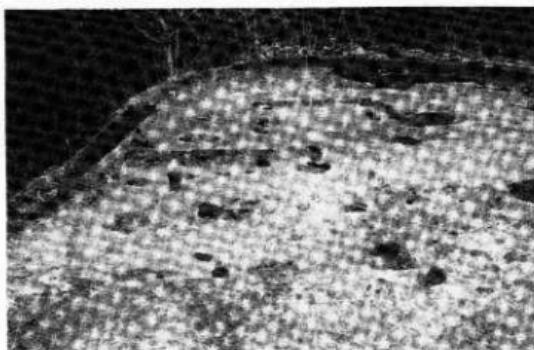


ST 08 + 10

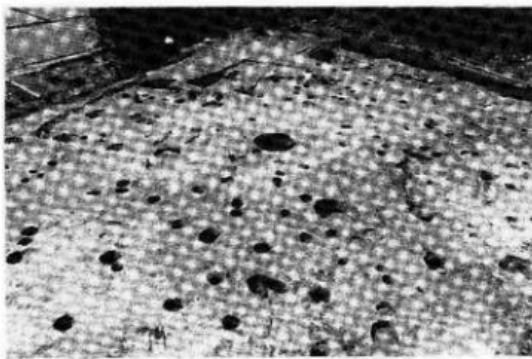
P L 8 第 5 号 · 7 号 · 8 号 · 10 号 竖穴遺構



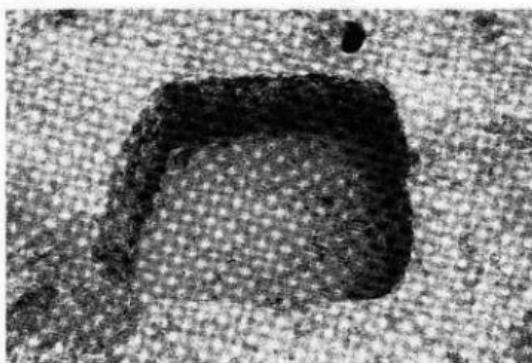
ST11



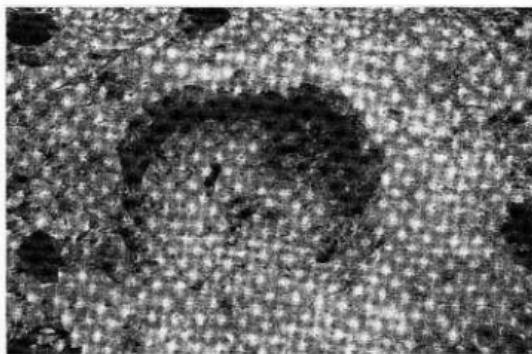
郭上面西侧竖穴遗構群



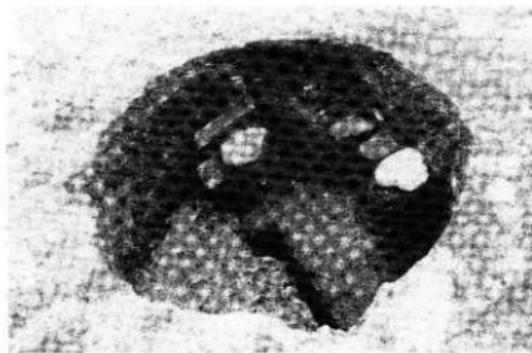
郭上面西侧竖穴遗構群



SK01

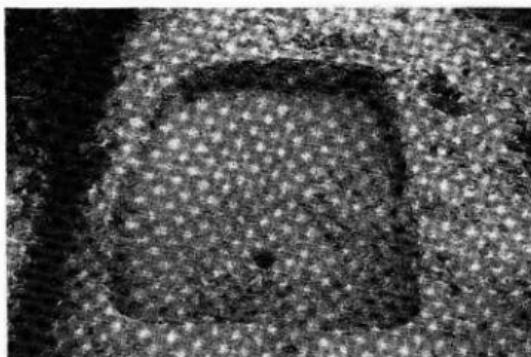


SK02

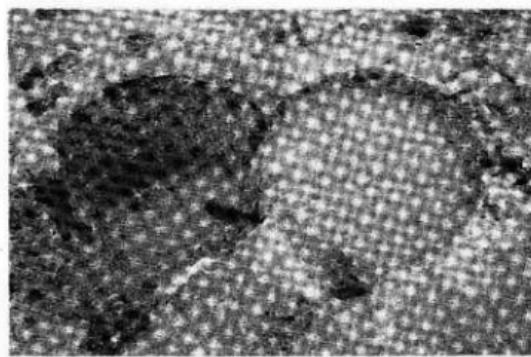


SK04

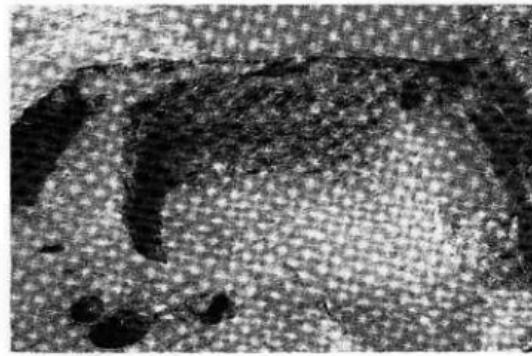
P L 10 第1号・2号・4号土壤



SK 06

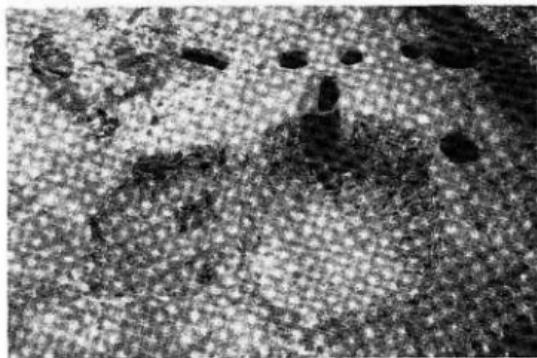


SK 08 · 09

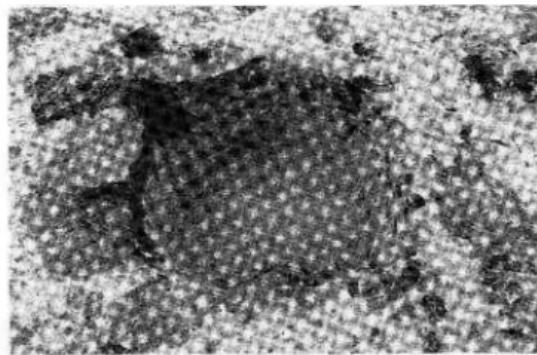


SK 10

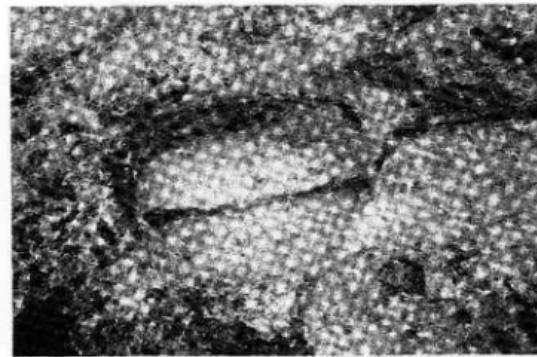
P L 11 第 6 号 · 8 号 · 9 号 · 10 号 土壤



SK11・12



SK13・50



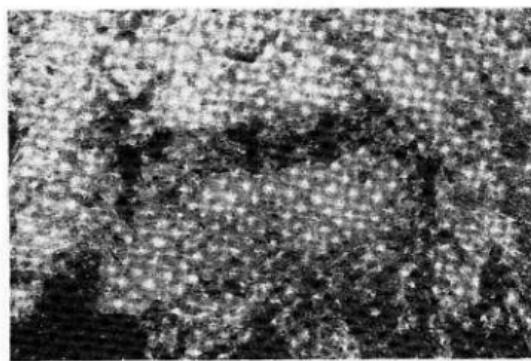
SK14



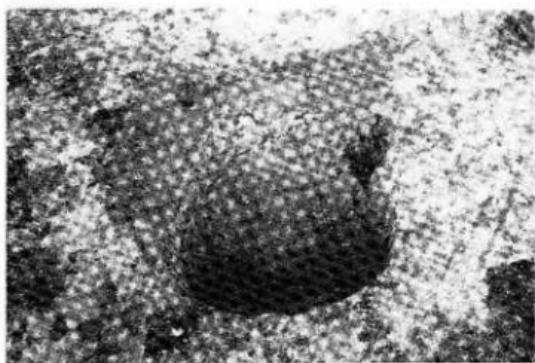
SK 15



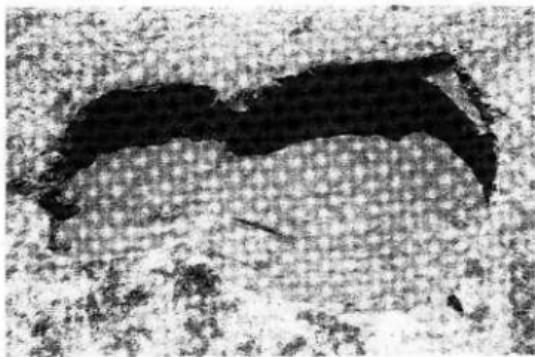
SK 19 + 20



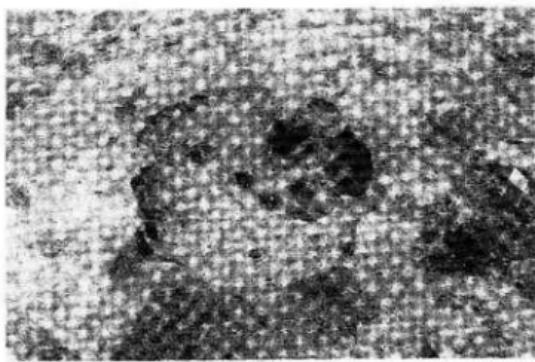
SK 20



SK 22

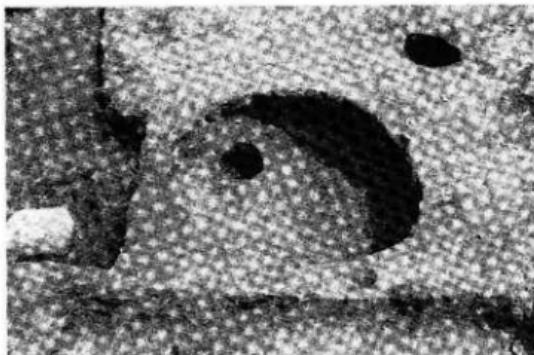


SK 24 + 25

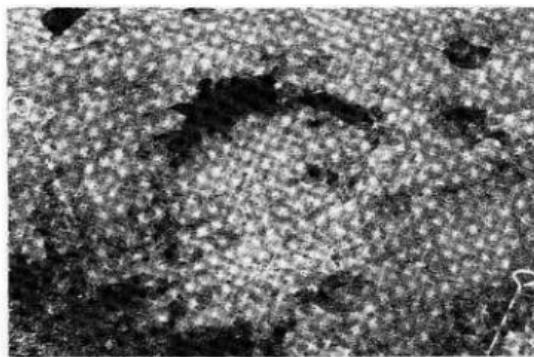


SK 27

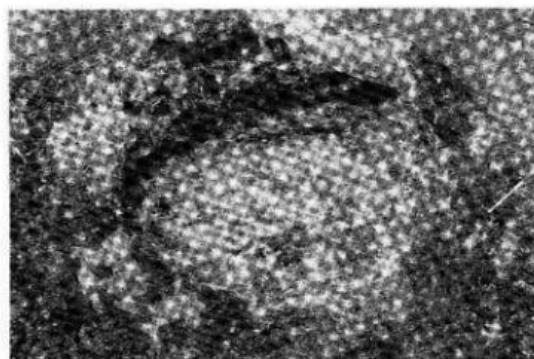
P L 14 第22号・24号・25号・27号土壤



SK 40

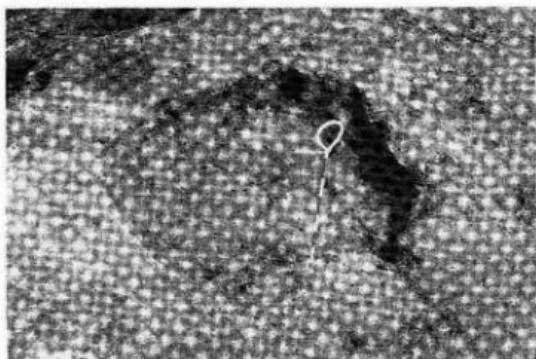


SK 44



SK 45

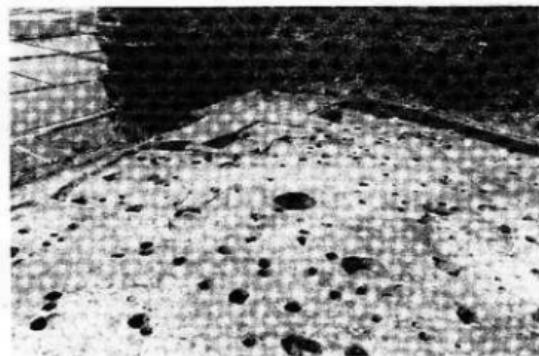
P L 15 第40号・44号・45号土壤



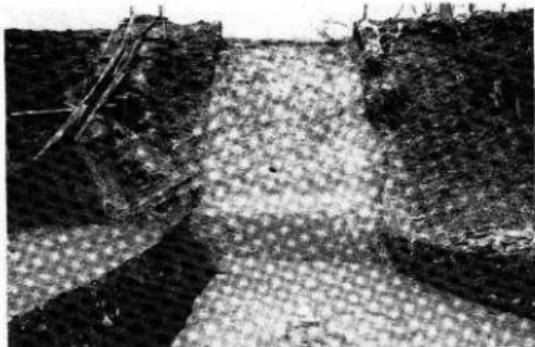
SK 47



郭上面全景



郭上面全景



SD01 (東より) と
犬走り造構



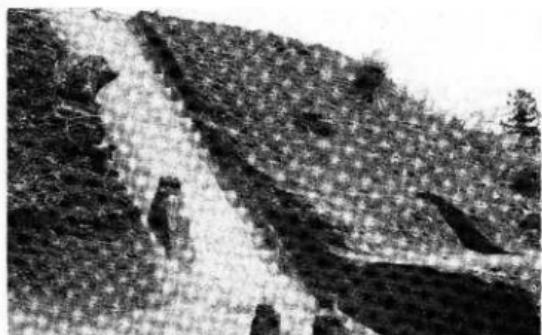
SD01 (郭より)



SD01

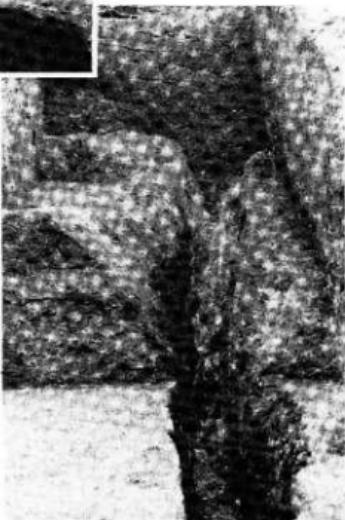


郭西側中段の
土壠・空堀

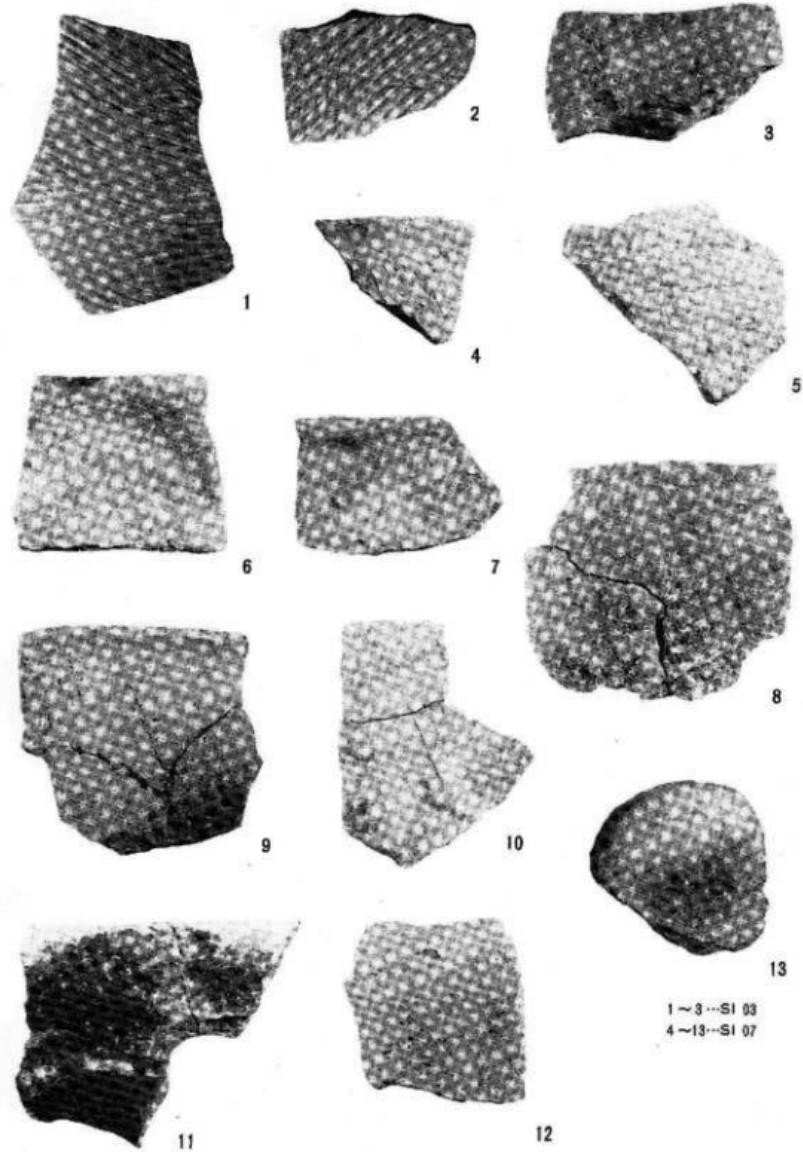


郭西側斜面

SD 03

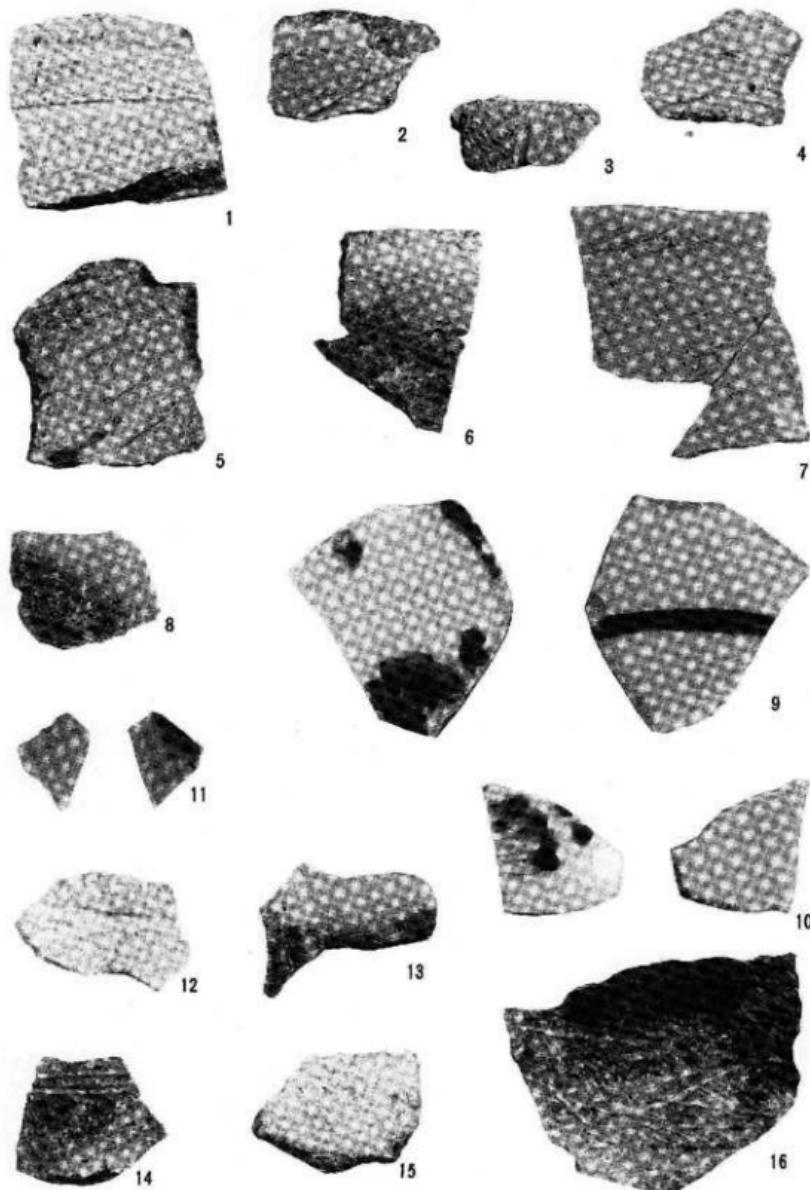


PL18 郭西側中段の土壠・第3号溝状遺構

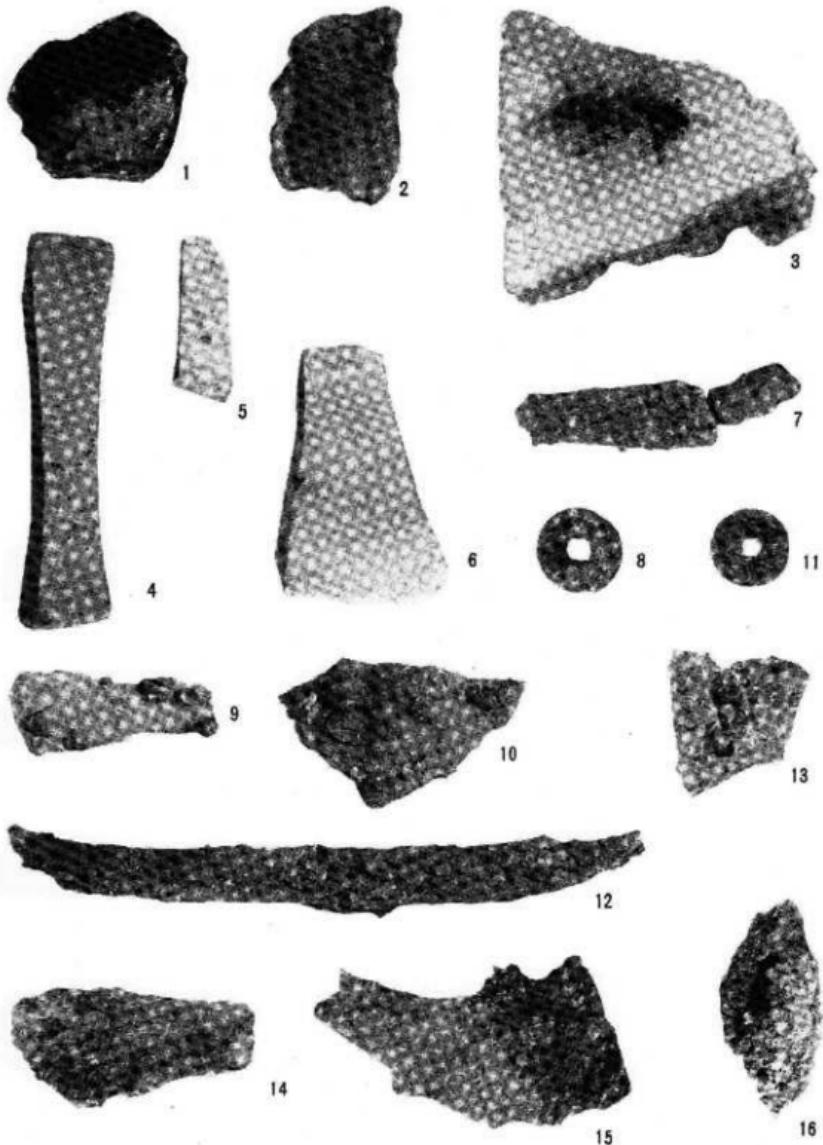


1~3--SI 03
4~13--SI 07

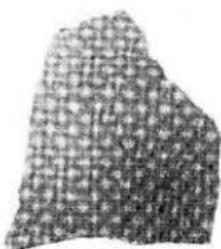
PL. 19 出土遺物(1)



P L 20 出土遺物(2)



P L.21 出土遺物(3)



1



2



3

2 SI 08

1, 3 SD01

鹿角市文化財調査資料 47

地羅野館跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 5 年 3 月 31 日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田 4-1

TEL 0186-23-5111

印 刷 所 南大越孔版社

〒017 秋田県大館市谷地町後 60
